

早稲田大学大学院 人間科学研究科

2020年度 科目等履修生 聴講可能科目シラバス

※聴講可能科目および時間割は変更になる可能性があります。
更新情報に注意してください。

日付	更新情報等
2020年1月30日	情報公開

授業科目名： 調査企画・設計特論	担当教員名： 柏 雅之
<p>授業の概要</p> <p>本授業では、農村・農山村再生を目的とした社会調査のあり方と方法について学ぶ。具体的には農山村地域における社会や地域農業の構造を知るためのヒアリング実態調査や、農林関連の各種統計データを用いた分析のあり方について学習する。授業は以下のようにを進められる。第1に、日本の農村・農山村の実態と、これを取りまく環境についての知見を得る。本研究科では、農山村や農業の実態についての予備知識を有していない大学院生が多いと想定されるので、この部分は少し時間をとって分りやすく学べるようにしていく。そこでの内容は、①日本の農山村と農業の実態、②農村と農業の構造を大きく規定してきた農業政策や農村開発政策の歴史、③現代農村・農業政策の基礎知識の順番で学ぶことにする。これらの基礎知識がないと農村・農山村調査は難しいからである。</p> <p>第2に、農村地域資源の管理と農村コミュニティの維持のための多様な担い手システムの実態について学習する。具体的には集落営農の意義と課題などについて学習する。これらは本授業での社会調査の重要な対象のひとつとなる。</p> <p>第3に、農村・農山村の社会構造や農業構造を知るための実態調査の手法について学習する。そこでは、①農家ヒアリング調査票の設計と作成、②農村地域資源管理の担い手組織のヒアリング調査票の設計と作成、③実際の農村ヒアリング調査の進め方などについて学習する。</p> <p>第4に、農村・農山村の社会構造や農業構造を知るための統計データについて学び、またその処理の手法について学んでいく。</p> <p>なお、必要に応じて実際に農村調査を行う場合もありうる。</p>	
<p>授業の到達目標</p> <p>(1) 農山村社会調査の目的とその目的に応じた調査のタイプについて知っている。</p> <p>(2) 農山村社会調査の流れ(手順)について理解している。</p> <p>(3) インタビュー調査の実施における留意点(研究倫理・個人情報保護など)を理解する。</p>	
<p>授業計画</p> <p>第1回：ガイダンス、農村における社会調査の目的</p> <p>第2回：農村・農山村地域の再生と社会調査</p> <p>第3回：日本の農村・農山村地域における社会問題</p> <p>第4回：農村・農山村地域の社会調査に必要な基礎知識</p> <p>第5回：農村コミュニティの存続と地域資源管理の担い手ー農村社会調査の重要な対象ー</p> <p>第6回：農村インタビュー調査の調査票の設計</p> <p>第7回：集落生産組織など組織経営体のインタビュー調査の調査票の設計</p> <p>第8回：調査仮説の構築</p> <p>第9回：インタビュー調査の手順ー機関調査、組織調査、戸別調査ー</p> <p>第10回：農村社会調査をベースとした実態研究の実際1ー集落の悉皆調査のケースー</p> <p>第11回：農村社会調査をベースとした実態研究の実際2ー個別経営体調査のケースー</p> <p>第12回：農村社会調査をベースとした実態研究の実際3ー集落組織調査のケースー</p> <p>第13回：農林水産統計データによる分析</p> <p>第14回：統計解析結果と実態調査結果</p> <p>第15回：総括、および受講者による調査票の作成結果の発表</p>	
<p>教科書</p> <p>資料を配布する。</p>	
<p>参考文献</p> <p>秋野正勝・今村奈良臣ら著『現代農業経済学』東京大学出版会</p> <p>豊田秀樹『調査法講義』朝倉出版</p> <p>鮎戸弘『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社</p>	
<p>成績評価方法</p> <p>試験 　　%</p> <p>レポート 60% 学期末のレポートで評価する。</p> <p>平常点評価 40% 出席点と毎回の授業態度を評価する。</p> <p>その他 　　%</p>	
<p>備考・関連URL</p>	

授業科目名： 質的調査法特論	担当教員名： 藤間 公太												
授業の概要 社会調査の方法には、量的調査と質的調査とがある。量的調査に統計学的知識がつきものなのと同様に、質的調査にもとづき研究を行うには、背景理論、調査技法、解釈枠組など、さまざまなことを身につけなければならない。さらに、生身の人間を相手とする質的調査は、量的調査とは異なる倫理が求められる。本特論では質的調査の方法、質的データの分析方法を習得するとともに、質的研究を実施するための理論的枠組について十分に理解することを目標とする。なお、本特論では、主として社会学的な観点からのアプローチに比重を置く。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・様々な質的データの分析方法および質的調査法について、既存の質的研究を読み説き理解する。(Ac6-3、Aa6-3) ・研究目的に沿った調査法と分析法を選び取る力を身につける (B56-3)。 ・実践を通して、質的データの分析および質的調査法の技法を身につける。 ・生身の人間を相手とする調査者としての倫理観を身につける。(F56-2、F3-1) 													
授業計画 第1回：ガイダンス（本特論の目的と概要、講師と受講生の自己紹介） 第2回：さまざまな質的調査——インタビュー、参与観察、会話分析、言説分析 etc 第3回：質的調査における立場——実証主義、解釈主義、対話的構築主義 第4回：研究倫理——人間を相手にすること 第5回：質的データの分析にあたって 第6回：言説分析①——理論編 第7回：言説分析②——実習編 第8回：インタビュー調査①——理論編 第9回：インタビュー調査②——実習編 第10回：参与観察法①——理論編 第11回：参与観察法②——実習編 第12回：質的比較分析 第13回：総合実習①——調査計画書の作成とデータ収集 第14回：総合実習②——データ分析と解釈 第15回：総復習													
教科書 特に指定しない													
参考文献 各回の授業で使用する文献を、その都度指定する。必ず読むことが求められる。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>20%</td> <td>レポートによって学習成果を評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>80%</td> <td>授業中の報告によって評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	20%	レポートによって学習成果を評価する。	平常点評価	80%	授業中の報告によって評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	20%	レポートによって学習成果を評価する。											
平常点評価	80%	授業中の報告によって評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 質的調査の技能は、座学のみではなく、実際に使用することで初めて身につく。受講生は、予習と実習のために、授業時間外に十分な自習時間の確保しなければならない。 なお、受講生の関心および理解度に沿って、上記の授業計画は変更されることもある。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">社会学説特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">木村 正人</p>
授業の概要 社会学が対象とする近代社会の重要な成立契機は、個人的自由の志向にある。同時にそれは近代の社会科学が国家や社会を構想する際の礎であり続けてきたが、「無縁社会」という表現に見られるように社会そのものの瓦解と液状化が進む今、個人の自由＝社会からの解放が人々を幸福にするという確信が揺らいでいるように思われる。この講義では「行為と社会における自由」をキーワードに、古典から現代に至る主要な社会理論を概説し、「自由主義」的な社会秩序のさまざまなモデルと課題について考察する。	
授業の到達目標 ■近代社会の理論と歴史を理解する (Ac 6 - 3、B56 - 3)。 ■主要な社会学説によって社会学理論を理解する (C6 - 1)。 ■理論を応用し、現代社会の諸問題について考察する (C6 - 2、D56 - 2)。	
授業計画 第1回：行為選択の論理と倫理：近代社会と社会学 第2回：危害原理と古典的自由主義：モーゼの十戒と J. S. ミル 第3回：暴力の独占と立憲主義：T. ホブズと J. ロックの国家論 第4回：愚行と共感の倫理：蜂の寓話と A. スミス 第5回：楽園と力：I. カントと 9. 11 以後の世界秩序 第6回：マクドナルド的合理性と鉄の檻：M. ヴェーバーと〈再〉魔術化する現代 第7回：自由からの逃走と〈絆〉への回帰：3. 11 以後の社会について考える 第8回：まとめと復習	
教科書 なし	
参考文献 毎回教場で指示する。	
成績評価方法 試験 % レポート % 平常点評価 50% 質疑等、授業参加の積極性。 その他 50% 毎回授業後、WasedaMoodle を通じて、質疑コメントを寄せてもらいます。	
備考・関連 URL 毎回授業のはじめに、前回授業に寄せられたコメントへのフィードバックを行う。受講者が大人数にならない限り、毎回議論の時間を設けたい。積極的な参加を望む。CourseN@vi の掲示板機能を用いて、フィードバックを行う。 http://kimuramasato.wordpress.com/	

授業科目名： 文化人類学の理論と方法	担当教員名： 竹中 宏子、原 知章、里見 龍樹
授業の概要 本授業は、文化人類学において著名な論文やエスノグラフィを読み（和文・英文）、人類学的研究の意義と限界を考察することを目的としている。文献のトピックは主に、文化概念、文化の記述および翻訳、フィールドワーク、人類学の下位分野（宗教人類学、開発人類学、都市人類学など）などである。文化人類学は 19 世紀末に学問として確立した分野であるが、それ以前の世界史や 21 世紀以降の社会の変遷を視野に入れながら、また、隣接科学との関連性も考慮しながら議論を重ね、考察につなげたい。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・文化人類学を大学院レベルで総合的に理解し、文化および社会現象の分析における人類学的視座の意義を考察することができる（B56－3） ・文化人類学の理論や方法を自らの専門性と関連付けて応用または援用することができる（C6－1） 	
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） 本講義の目的と概要について説明します。 第2回：人類学の黎明期からボアズの文化相対主義まで 教科書第1章～第2章を主に扱います。 第3回：機能主義人類学、民族誌の展開（1） 教科書第3章～第4章を主に扱います。 第4回：民族誌の展開（2） 教科書第5章～第6章を主に扱います。 第5回：構造人類学 教科書第7章を主に扱います。 第6回：ターナーとパフォーマンス研究 教科書第8章を主に扱います。 第7回：ギアツの解釈人類学 教科書第9章を主に扱います。 第8回：新しい人類学 教科書第10章～11章を主に扱います。	
教科書 太田好信・浜本 満編『メイキング文化人類学』、世界思想社	
参考文献 授業中に適宜紹介します。	
成績評価方法 試 験 % レポート 50% 課題レポートの内容 平常点評価 50% 授業に臨む態度（授業準備、授業中の発言内容や頻度、など） そ の 他 %	
備考・関連 URL 授業の進度によって、授業計画に変更が生じる場合があります。	

授業科目名： <p style="text-align: center;">歴史学の理論と方法</p>	担当教員名： <p style="text-align: center;">加藤 茂生、村上 公子</p>																
授業の概要 <ul style="list-style-type: none"> ・過去とは何か、過去は正しく認識できるのか、歴史とは何か、など歴史哲学の基礎を学ぶ。 ・様々な歴史学のアプローチ（社会史、思想史、文化史、比較史、アナール派、マルクス主義、言語論的転回、マイクロヒストリー、ジェンダー史、ポストコロニアリズムなど）を学び、幅広く歴史学の方法の基礎を学ぶ。 																	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・歴史学の理論の変遷及び多様化を知り、さらに歴史叙述の変化を知ることを通じて、歴史とは何か、また歴史学の意義とは何かについて洗練された考察をすることができる。 ・現在の歴史学の基本的な研究方法を知り、自分の研究に生かすことができる。 ・歴史的考察を現代の政治的問題のアクチュアルな考察に生かすことができる。 中目標 C5-1 B56-3 F56-1																	
授業計画 第1回：ガイダンス、歴史学の歴史（担当：加藤茂生） 第2回：歴史とは何か（担当：加藤茂生） 第3回：歴史認識の諸問題、隣接科学との交流（歴史学と経済学、社会学、人類学）（担当：加藤茂生） 第4回：さまざまな歴史学（社会史、思想史、文化史、比較史）（担当：加藤茂生） 第5回：歴史のアクター（合理的アクター、階級、ジェンダー）（担当：村上公子） 第6回：ポストモダン歴史学（歴史と言語、脱構築、ニュー・ヒストリシズム）（担当：村上公子） 第7回：歴史学とポスト・コロニアリズム（担当：村上公子） 第8回：歴史学の未来（担当：村上公子）																	
教科書 ノーマン・J. ウィルソン『歴史学の未来へ』南塚信吾・木村真監訳（法政大学出版局、2011年）。																	
参考文献 授業時に指示する。																	
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;"></td> <td style="width: 10%;">%</td> <td style="width: 70%;"></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td></td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>100%</td> <td></td> <td>テキストの理解力、洞察力等で評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td></td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験		%		レポ ー ト		%		平常点評価	100%		テキストの理解力、洞察力等で評価する。	そ の 他		%	
試 験		%															
レポ ー ト		%															
平常点評価	100%		テキストの理解力、洞察力等で評価する。														
そ の 他		%															
備考・関連 URL																	

授業科目名： <p style="text-align: center;">環境デザイン学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">佐藤 将之、宗政 由桐</p>												
授業の概要 環境心理からみた環境デザイン理論を考察する講義である。この講義における環境デザインとは、建築・都市空間を造るといった、単に物理的環境を設定するものだけではなく、プログラムや人員配置、さらには社会や文化にも及ぶものである。建築の利用者＝人間を中心としながら建築・都市環境の使われ方に焦点を当て、環境境行動研究・建築計画研究を主体とした環境デザインのこれまでとこれからを考える講義・課題を行う。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・人間の建築や都市の環境に対する構えを議論できる環境心理学的手法や建築都市計画学の視点を身につけ、日常生活等に応用できる。(C6-1) ・人間生活におけるデザインの意味や価値を理解し、今後の建築都市環境の展望ができる。(D56-2) 													
授業計画 第1回：オリエンテーション＋課題の出題 第2回：環境デザイン理論の構築 都市評価の理論 第3回：住みたい家と住みやすい家 第4回：意図モデルと行動モデル 第5回：環境決定論・相互作用論・相互浸透論 第6回：環境移行・環境の時間的移行 第7回：「〇〇感」と都市評価 第8回：総括													
教科書 和田浩一・佐藤将之編著：フィールドワークの実践－建築デザインの変革をめざして－：朝倉書店													
参考文献													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>各自の興味あるものを講義で提供する視点で論じてもらう</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>議論への参加</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	各自の興味あるものを講義で提供する視点で論じてもらう	平常点評価	50%	議論への参加	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	各自の興味あるものを講義で提供する視点で論じてもらう											
平常点評価	50%	議論への参加											
そ の 他	%												
備考・関連URL 招聘講師（ゲストスピーカー）が講義室で1度担当する回がある。													

授業科目名： 発達行動学特論	担当教員名： 根ヶ山 光一
授業の概要 発達を「行動」という生命現象から理解するという発達行動学において、親子の求心（親和）的・遠心（反発）的相互作用やその発達的变化は重要である。とくに遠心性の側面は従来見過ごされてきたが、親子の相互自律性の発達を理解するうえにおいて欠くことのできない観点である。またヒトは協力的に育児を行う動物種である。親子は周囲のモノやヒト、及びそれが組み合わさったシクミ（施設・制度）からなるシステムの中に位置付いており、そういった複合的なアロマザリングシステムとどのような関係を構築しつつ発達するかも重要な論点である。本講義では、こういった側面から子どもの自立発達について講じ、皆でディスカッションする。	
授業の到達目標 ・人間発達に関して基礎研究を実践に活かすことができる（C6－1） ・親子を巡る社会問題に対して自らの立場から主張できる（E56－1、F56－1、G36－5）	
授業計画 第1回：オリエンテーション 概要説明，序章 第2回：講読1 「離れつつ保護する」 第3回：講読2 「子別れのプロセス」 第4回：講読3 「子どものメッセージを読み取る・ほどよい隔たりとは何か」 第5回：講読4 「ほどよい隔たりとは何か」 第6回：講読5 「子どものからだと危機管理」 第7回：自由発表1 各自の関心に応じた発表1 第8回：自由発表2 各自の関心に応じた発表2	
教科書 根ヶ山光一「<子別れ>としての子育て」NHK 出版	
参考文献 適宜指示	
成績評価方法 試 験 0% 試験は行わない レポ ー ト 40% 自由発表内容の質 平常点評価 40% 討論への参加度、問題意識の高さ そ の 他 20% 出席状況	
備考・関連URL Course N@vi 上でフィードバックを行う https://sites.google.com/site/negayamawsd/	

授業科目名： <p style="text-align: center;">災害研究法特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">辻内 琢也</p>												
授業の概要 地震・津波・原発事故・洪水・豪雨といったように、わが国は毎年新しい大規模災害に襲われており、災害による物的・人的・社会的インパクトを測定し、災害後に必要とされるさまざまな支援を見定め、社会の復興に向けた合理的な政策提言を行うなど、世界に先駆けた災害研究が求められている。災害研究には、医学・疫学・心理学・福祉学・社会学・人類学・法学・環境科学といった学融合的な研究が必須である。本講座では、東日本大震災後に実際に行われてきたさまざまな人間科学研究から、質問紙による量的・質的研究、インタビュー研究、エスノグラフィー研究を総括し、得られたフィールドデータ・自由記述データを題材に、KJ 法等を使用した分析のグループ・トレーニングも行う。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・災害に関連したデータを、適切かつ高度な分析手法で分析し、分析結果を的確に読み取り、適切な図やグラフで表現することができる。(Ad56-2、Ad56-3、Ad56-4) ・災害に関係する複数の専門性を含む、複眼的な視点から研究課題を設定することができる。(C6-1) ・医学・疫学・心理学・福祉学・社会学・人類学・法学・環境科学等、それぞれの専門性を尊重しつつ、共有できる思考や言語表現を行うことができる。(E56-2) 													
授業計画 第1回：災害人間科学研究概論1（フィールドワークとエスノグラフィー）（講義） 第2回：災害人間科学研究概論2（アンケート調査による質的・量的研究）（講義） 第3回：災害人間科学研究概論3（人間科学によるセオリーの構築）（講義） 第4回：災害人間科学研究概論4（ビデオ視聴とディスカッション） 第5回：データ分析実習1（東日本大震災・原発事故被災者の自由記述データの読み込み） 第6回：データ分析実習2（東日本大震災・原発事故被災者の自由記述データのKJ法による質的分析） 第7回：データ分析実習3（東日本大震災・原発事故被災者の自由記述データからの仮説図構成） 第8回：まとめ（ワールドカフェ）													
教科書 1) 辻内琢也・増田和高（編著）『フクシマの医療人類学』遠見書房，2019 2) 辻内琢也（編著）『ガジュマル的支援のすすめ：一人ひとりのところに寄り添う（早稲田大学ブックレット「震災後」に考える31）』早稲田大学出版，2013 3) Takuya Tsujiuchi（編著）“Human Science of Disaster Reconstruction” Interbooks，2019													
参考文献 1) 早稲田大学・震災復興研究論集編集委員会（編）鎌田薫（監修）『震災後に考える；東日本大震災と向き合う92の分析と提言』早稲田大学出版部，2015〔竹中，辻内，石川・小島，増田，根ヶ山，平田論文参照〕 2) セシル・G・ヘルマン（著）辻内琢也（監訳責任）牛山美穂・鈴木勝己・濱雄亮（監訳）『ヘルマン医療人類学—文化・健康・病い』金剛出版，2018〔第19章：医療人類学における新しい研究方法〕 3) 戸田典樹（編著）『福島原発事故 漂流する自主避難者たち：実態調査からみた課題と社会的支援のあり方』明石書店，2016 4) 戸田典樹（編著）『福島原発事故 取り残される避難者：直面する生活問題の現状とこれからの支援課題』明石書店，2018 5) 関谷雄一，高倉浩樹（編著）『震災復興の公共人類学』東京大学出版会，2019													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>授業終了時にレポートを課す。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>データ分析実習など、授業への貢献度を評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	授業終了時にレポートを課す。	平常点評価	50%	データ分析実習など、授業への貢献度を評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	授業終了時にレポートを課す。											
平常点評価	50%	データ分析実習など、授業への貢献度を評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 1) 早稲田大学災害復興医療人類学研究所ホームページ URL： http://www.waseda.jp/prj-wima/ 2) 辻内琢也，増田和高，井戸川克隆，高山恒明，佐藤純俊，大石美恵子，北村浩，岡本卓大，薄井篤子：ポスト3.11の災害復興と環境問題を考える [第1報]；被災当事者・支援者の立場から。人間科学研究27(2)：pp241-254，2014 3) 辻内琢也，根ヶ山光一，竹中晃二，増田和高，佐藤純俊，高山恒明，北村浩，岡本卓大，薄井篤子，大石美恵子，ユージン・F・オーガスタファー，菊池靖：ポスト3.11の災害復興と環境問題を考える [第2報]；災害に伴う心理的課題・社会的課題に対峙する。人間科学研究28(1)：pp157-167，2015 4) 辻内琢也：原発災害が被災住民にもたらした精神的影響。学術の動向22(4)：pp8-13，2017。													

授業科目名： 保健医療福祉文献検索評価法	担当教員名： 扇原 淳
授業の概要 疫学の基本的知識およびEvidence based Healthcare の考え方に加えて、多種多様な保健医療福祉情報を適切に吟味し、利用する方法を学習する。 具体的には、保健・医療・福祉領域の課題をテーマとする学生自らが主体的に研究を推進できるように、PubMed、医学中央雑誌をはじめとした保健医療福祉分野で使用頻度の高いデータベースやwebサイトの利活用法を学習する。さらに、修士論文作成に不可欠な体系的に文献をまとめる技術を身につける。	
授業の到達目標 ・保健医療福祉領域に関する研究を推進するために、各種データベースを用いた情報検索ができる。Ad56-1 ・収集した学術論文や情報を批判的に吟味し、自らの研究に主体的に活用できる。B56-2, B56-3, B56-4, F56-2	
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） / 本講義の目的と概要について説明します。事前学習：課題資料の読了。 事後学習：レポート課題のまとめと提出。 第2回：学術論文の基本構成／研究デザイン事前学習：課題資料の読了。 事後学習：BBS 上への課題提出と討論。 第3回：文献レビュー／文献検討／文献レビューの流れ／文献レビューで求められる習慣事前学習：課題資料の読了。 事後学習：BBS 上への課題提出と討論。 第4回：探索的文献検索／系統的文献検索／文献選択基準／文献検索法／文献データベース／文献管理事前学習：課題資料の読了。 事後学習：BBS 上への課題提出と討論。 第5回：内容検討／要約表／文献統合事前学習：課題資料の読了。 事後学習：BBS 上への課題提出と討論。 第6回：体系的文献レビュー実習事前学習：課題資料の読了。 事後学習：BBS 上への課題提出と討論。 第7回：メタ・アナリシス実習事前学習：課題資料の読了。 事後学習：BBS 上への課題提出と討論。 第8回：前2回の実習のまとめ・報告事前学習：実習のまとめと発表資料準備の完了。 事後学習：BBS 上へのまとめの提出。	
教科書 なし	
参考文献 安部陽子翻訳, 看護研究のための文献レビュー, 医学書院, 2012	
成績評価方法 試験 % レポート 60% レポートによる評価 平常点評価 40% 平常点による評価 その他 %	
備考・関連URL	

授業科目名： <p style="text-align: right;">生活支援工学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">巖淵 守</p>												
授業の概要 人は誰しも加齢に伴い、身体や認知面に何らかの障がいを抱える。現在利用可能な様々な福祉機器を知り、障がいがある方や高齢の方が生き生きとして日常生活や様々な活動を行うために生活支援工学をどのように応用できるかについて議論する。併せて、生活支援技術製品やその利用に関する国内外の動向を知り、今後の技術利用・開発について考察する。講義、グループワーク、プレゼンテーションなどを織り交ぜながら授業を進める。													
授業の到達目標 ・高齢社会における人の生活への工学技術応用に関して、多様な視点からの考察ができるようになる。(C6-1) ・与えられた改善課題に対して、課題解決のためのプランを提示できるようになる。(D56-2)													
授業計画 第1回：ガイダンス、障がいとテクノロジー 第2回：生活支援工学の現状を知る (肢体不自由) 第3回：生活支援工学の現状を知る (感覚系障がい、認知面での障がい、加齢による影響など) 第4回：生活支援工学の現状を知る (コミュニケーション障がい、重度・重複障がいなど) 第5回：身の回りにある ICT を利用した生活支援工学 第6回：海外の生活支援技術製品の動向 第7回：生活支援技術普及へのアプローチと課題 第8回：第1回～第7回の内容に関するグループワーク													
教科書 なし													
参考文献 巖淵 守・中邑賢龍, 2017, 福祉に役立つ一般製品の選び方, 使い方の基礎知識, 福祉機器 選び方・使い方 副読本 自立支援編, 一般財団法人保険福祉広報協会													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>新しい気づきや発見、新たに生じた疑問や課題、学んだことを今後どう活かすかについて明確に述べられているかどうかを評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業内での発言、課題提出状況等を総合して評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	新しい気づきや発見、新たに生じた疑問や課題、学んだことを今後どう活かすかについて明確に述べられているかどうかを評価する。	平常点評価	50%	授業内での発言、課題提出状況等を総合して評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	新しい気づきや発見、新たに生じた疑問や課題、学んだことを今後どう活かすかについて明確に述べられているかどうかを評価する。											
平常点評価	50%	授業内での発言、課題提出状況等を総合して評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL													

授業科目名： 福祉サービス・支援評価法	担当教員名： 岩崎 香、植村 尚史、古山 周太郎												
授業の概要 近年、福祉サービスを提供した結果、その成果について明確に提示することが求められている。しかしながら、福祉専門職のクライアントへの関わりは多様であり、個別的な側面を持っているために評価が難しいと言われている。開発されている評価方法は様々であるが、その中のひとつである質的研究法を取り上げながら、実践現場のリアリティをどう表現するかということに関して学ぶ。													
授業の到達目標 ・社会福祉実践の現状や成果を表現し、評価する。(F56-2) ・代表的な方法の一つである質的研究に関する知識を獲得し、理解を深める。(B56-3)													
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） / 本講義の目的と概要について説明を行う。 第2回：社会福祉実践における実証研究の意義／効果測定の一方法としての質的研究の位置づけとその意義について学ぶ。 第3回：質的研究法(1)個別インタビュー／質的データを得るためにもっとも多用されている個別インタビューの方法、データの分析等について学ぶ。 第4回：質的研究法(2)グループ・インタビュー／フォーカスグループインタビューを中心に、インタビューの方法、データの分析等について学ぶ。 第5回：質的研究法(3)その他の質的調査法／内容分析やナラティブアプローチ、テキストマイニングによる分析などについて学ぶ。 第6回：質的研究による社会福祉実践の評価事例①インタビュー調査例／インタビューデータを分析して作成した論文を用い、インタビュー調査に関して検討を加える。 第7回：質的研究による社会福祉実践の評価事例②アクションリサーチ等参加型研究例／アクションリサーチに関する論文を分析して作成した論文を用い、インタビュー調査に関して検討を加える。 第8回：まとめ／質的研究の可能性と限界について検討を行う。													
教科書 なし													
参考文献 授業の中で提示													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか重点を置く。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか重点を置く。	平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。	その他	%	
試験	%												
レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうか重点を置く。											
平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。											
その他	%												
備考・関連URL レポートへのフィードバックは最終授業で行う。													

授業科目名： 医療・福祉マネジメント分析法	担当教員名： 松原 由美
授業の概要 この科目では、医療・福祉事業等を行う非営利組織の経営のあり方について学ぶ。そもそも非営利組織とは何か、非営利組織の経営理念と戦略、非営利組織の存在意義、非営利組織の経営評価のあり方、非営利組織の利益や内部留保のあり方等である。具体的には、たとえば将来のコストに充てるべき内部留保を計算し、経営の継続性のために用いるべき利益と、事業拡大等のための投資に用いることができる利益を区分し、適切な経営管理を行うために、財務諸表等をもとに経営の実状を分析し、経営指針を作成する方法論を習得する。 ＊この科目は当該授業内容に関する実務の経験を有する教員等がその実務経験を活かして講義等を行う科目です。 ＊この科目は主として実践的な教育が行われる科目です	
授業の到達目標 ・医療・福祉事業のような非営利事業の経営管理の目標を理解することができる（F56-2）。 ・財務諸表等をもとに、非営利事業の経営分析ができる（Ad56-2、Ad56-3）。	
授業計画 第1回：オリエンテーション 医療・介護・福祉分野における経営を学ぶ意義について説明します。 第2回：経営分析① 医療・介護・福祉事業における財務諸表の見方について学びます。 第3回：経営分析② 医療・介護・福祉事業における経営指標の見方について学びます。 第4回：経営分析③ 医療・介護・福祉事業の事業特質について学びます。 第5回：経営分析④ 実在する事業者の経営分析を行います。 第6回：非営利組織とは 非営利組織の存在意義、営利組織との違いについて学びます。 第7回：非営利組織の利益概念 非営利組織の利益概念について、営利組織との対比で学びます。 第8回：医療・介護・福祉事業における非営利組織の経営のあり方 内部留保と非営利組織の経営のあり方について目的に応じた内部留保の捉え方、分析方法、非営利組織の経営のあり方について学びます。	
教科書 松原 由美『介護事業と非営利組織の経営のあり方―利益と内部留保のあり方を中心に―』医療文化社	
参考文献 授業の中で適宜紹介する。	
成績評価方法 試験 % 実施しない。 レポート 50% レポートを適宜提出させ、その内容を評価の対象とする。 平常点評価 50% 現場実習、授業中の議論における発言・質問等をみて総合的に評価する。 その他 % 遅刻、早退は、理由なき場合減点する。	
備考・関連URL 毎回、電卓を持参してください。	

授業科目名： 老年社会福祉学ゼミ（1） A	担当教員名： 加瀬 裕子
授業の概要 Gerontological Social Work や Social Gerontology の基本的文献を講読し、高齢者の強さに依拠したストレングス・モデルによるサービスや社会制度のあり方について考察するとともに、ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークのいずれかを実際の現場で試行し、スーパービジョンの体験を実現する。	
授業の到達目標 (1) ソーシャルワークの目的と方法について概要を述べる事が出来るようになる。(C5-1) (2) ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークのいずれかを応用できるようになることをめざす。(D56-2)	
授業計画 第1回：英語論文講読1 第2回：英語論文講読2 第3回：英語論文講読3 第4回：研究デザイン1 第5回：研究デザイン2 第6回：ソーシャルワークの歴史について 第7回：ソーシャルワークのモデルについて 第8回：高齢者福祉の実際について 1-介護とソーシャルワーカー 第9回：高齢者福祉の実際について 2-地域づくりとソーシャルワーカー 第10回：高齢者福祉の実際について 3-多職種連携 第11回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第12回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第13回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第14回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第15回：授業のまとめ	
教科書 ゴフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」相川書房 1986 加瀬裕子著「認知症ケアマネジメント-行動・心理症状に対処する技法」ワールドプランニング社 2016	
参考文献 在宅ケア学会編「在宅ケア学3 巻在宅ケアとチームアプローチ」ワールドプランニング社 2015	
成績評価方法 試験 % レポート 50% レポートの意義・目的・論理展開が明確に記述されていること。 平常点評価 50% 研究プロジェクト毎に行う発表を評価する。 その他 %	
備考・関連URL	

授業科目名： 老年社会福祉学ゼミ（1） B	担当教員名： 加瀬 裕子
授業の概要 先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する方法を学ぶ。 各自のテーマにあわせて、調査を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。	
授業の到達目標 (1) 質的研究方法・量的研究方法を理解し、学術論文を的確に評価できるようになる。(Ac 6－1) (2) 研究目的にあわせた適切な研究方法を選択できるようになる。(C6－2)	
授業計画 第1回：授業の進め方について 第2回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 1 第3回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 2 第4回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 3 第5回：学会誌「老年社会科学」等に掲載された研究論文についての討論 4 第6回：学会誌「社会福祉学」等に掲載された研究論文についての討論 1 第7回：学会誌「社会福祉学」等に掲載された研究論文についての討論 2 第8回：老年学における研究の動向についての討論 第9回：社会福祉学における研究の動向についての討論 第10回：論文の書き方について 第11回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第12回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第13回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第14回：ケースワーク・グループワーク・コミュニティーワークの実習 第15回：授業のまとめ	
教科書 学会誌「老年社会科学」2010～2016 学会誌「社会福祉学」2010～2016	
参考文献 ゴフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」相川書房 1986 加瀬裕子著「認知症ケアマネジメント-行動・心理症状に対処する技法」ワールドプランニング社 2016	
成績評価方法 試 験 % レポート % 平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。 その他 %	
備考・関連URL	

授業科目名： 行動臨床心理学ゼミ（1） A	担当教員名： 嶋田 洋徳												
授業の概要 認知行動療法や行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的發展、方法論に関する理解を深める。特に、心理臨床場面への応用を前提とした認知や行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との統合的な理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。さらに、国内外で実施される学会、研修会、ワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。 なお、この科目は当該授業内容に関する実務の経験を有する教員等がその実務経験を活かして主として実践的な教育が行われる科目である。													
授業の到達目標 ・行動臨床心理学（認知行動療法や行動療法）の最新理論や技法の理解、説明ができる。（A a 5-1、A c 5-1、B 5 6-3、B 5 6-4、C 5-1）													
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（1） 第3回：症例研究と実践報告検討（1） 第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（1） 第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（2） 第6回：症例研究と実践報告検討（2） 第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（2） 第8回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（3） 第9回：症例研究と実践報告検討（3） 第10回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（3） 第11回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（1） 第12回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（2） 第13回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（4） 第14回：症例研究と実践報告検討（4） 第15回：春学期のまとめ													
教科書 使用しない。レポーターを担当する者がレジュメ等を配布する。													
参考文献 授業中に適宜紹介する。													
成績評価方法 <table> <tr> <td>試 験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>60%</td> <td>課題内容の達成度による。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>40%</td> <td>討論における貢献度による。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	60%	課題内容の達成度による。	平常点評価	40%	討論における貢献度による。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	60%	課題内容の達成度による。											
平常点評価	40%	討論における貢献度による。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 日本認知・行動療法学会、アジア認知行動療法学会、世界認知行動療法会議等の国内外の関連学会、研修会、ワークショップ等に参加することを予定している。 課題に関しては、その都度全体に対してフィードバックを行う。													

授業科目名： 行動臨床心理学ゼミ（1） B	担当教員名： 嶋田 洋徳												
授業の概要 認知行動療法や行動療法に関する最近の研究を取り上げ、最新の知見、理論的發展、方法論に関する理解を深める。特に、心理臨床場面への応用を前提とした認知や行動に関する研究に主眼を置く。また、症例研究を取り上げ、研究知見との統合的な理解、アセスメントや治療技法に関する行動論的理解を試みる。さらに、国内外で実施される学会、研修会、ワークショップ等に参加し、最新の高度な心理臨床技法の習得を目指す。 なお、この科目は当該授業内容に関する実務の経験を有する教員等がその実務経験を活かして主として実践的な教育が行われる科目である。													
授業の到達目標 ・行動臨床心理学（認知行動療法や行動療法）の最新理論や技法の理解、説明ができる。（A a 5-1、A c 5-1、B 5 6-3、B 5 6-4、F 5 6-2）													
授業計画 第1回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（4） 第2回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（5） 第3回：症例研究と実践報告検討（5） 第4回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（5） 第5回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（6） 第6回：症例研究と実践報告検討（6） 第7回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（6） 第8回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（3） 第9回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（4） 第10回：心理臨床関連ワークショップへの参加、およびまとめ（5） 第11回：専門雑誌に掲載された最新の研究知見の検討（7） 第12回：症例研究と実践報告検討（7） 第13回：研究テーマに関する研究動向および方法論の検討（7） 第14回：秋学期のまとめ 第15回：総合まとめ													
教科書 使用しない。レポーターを担当する者がレジюме等を配布する。													
参考文献 授業中に適宜紹介する。													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試 験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>60%</td> <td>課題内容の達成度による。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>40%</td> <td>討論における貢献度による。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	60%	課題内容の達成度による。	平常点評価	40%	討論における貢献度による。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	60%	課題内容の達成度による。											
平常点評価	40%	討論における貢献度による。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 日本認知・行動療法学会、アジア認知行動療法学会、世界認知行動療法会議等の国内外の関連学会、研修会、ワークショップ等に参加することを予定している。 課題に関しては、その都度全体に対してフィードバックを行う。													

授業科目名： 生体情報工学特論	担当教員名： 百瀬 桂子												
授業の概要 生体情報工学とは、生体システムの計測・処理・制御の解析を工学的手法で行うとともに、それらの計測の結果から知ることができた生体システムの仕組みや情報を、工学的及び医用工学的に応用することを目指すものである。本講義では特にヒトの感覚・知覚情報処理のメカニズムを対象を絞り、関連する生体電気磁気現象と非侵襲生体計測の原理・技術について解説する。													
授業の到達目標 ・一般的な生体電気磁気現象の概略を理解する (B56-3) ・生体電気磁気計測の原理・技術の基礎を理解する (B56-3, B56-4)													
授業計画 第1回：授業の概要と進め方 事前学習： 配付資料の事前読了。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第2回：生体電気磁気現象 事前学習： 配付資料の事前読了。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第3回：生体信号の非侵襲計測 事前学習： 配付資料の事前読了。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第4回：生体信号処理の基礎 事前学習： 配付資料の事前読了。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第5回：脳機能計測と神経モデリング 事前学習： 配付資料の事前読了。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第6回：身体・感覚機能計測 事前学習： 配付資料の事前読了。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第7回：生体信号を利用した研究（文献講読）（1） 事前学習： 配付資料の事前読了。担当文献の発表準備。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習 第8回：生体信号を利用した研究（文献講読）（2） 事前学習： 配付資料の事前読了。担当文献の発表準備。 事後学習： 配付資料や参考資料の確認による復習													
教科書 なし。													
参考文献 講義時に必要に応じて紹介する予定。													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>％</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>第8回に課題を提示します。提出されたレポートについて、次の点を評価します。 ・講義内容を正しく理解できているか。 ・講義内容と各自の考えもしくは自身の研究テーマを絡めて、深い考察ができているか。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>文献講読について、以下の点を評価します。 ・担当文献の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性。 ・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>％</td> <td></td> </tr> </table>		試験	％		レポート	50%	第8回に課題を提示します。提出されたレポートについて、次の点を評価します。 ・講義内容を正しく理解できているか。 ・講義内容と各自の考えもしくは自身の研究テーマを絡めて、深い考察ができているか。	平常点評価	50%	文献講読について、以下の点を評価します。 ・担当文献の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性。 ・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度。	その他	％	
試験	％												
レポート	50%	第8回に課題を提示します。提出されたレポートについて、次の点を評価します。 ・講義内容を正しく理解できているか。 ・講義内容と各自の考えもしくは自身の研究テーマを絡めて、深い考察ができているか。											
平常点評価	50%	文献講読について、以下の点を評価します。 ・担当文献の理解度と発表内容および説明方法、およびそれらへの取り組みの積極性。 ・担当者の発表内容に基づく議論への積極性と貢献度。											
その他	％												
備考・関連URL 各自の取り組みや課題に対するフィードバックは、授業内で行う。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">加齢人間工学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">倉片 憲治</p>												
授業の概要 高齢者（及び障害者）が引き起こすエラーや事故、及び日常的に経験する不便さ・困難さには、感覚・認知特性の加齢変化が原因であるものが少なくない。それら諸特性の加齢変化に関する知識をもとに、人間工学的な解決方法（人間中心設計手法）を議論していく。さらに、年齢に関わりなく使いやすい製品やサービスの設計、快適な環境づくり（アクセシビリティの向上）に向けた国内外の技術基準（ガイドライン、規格等）や施策の動向について詳説する。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・感覚・認知特性の加齢変化によって引き起こされる製品・サービス・環境の諸問題について、その解決に向けた人間工学的な実践力を身につける。(B56-3, D56-2) ・アクセシビリティに対する国内外の技術基準及び施策の動向について、幅広い視野と知識を獲得する。(B56-4) 													
授業計画 第1回：導入：加齢人間工学と現代社会 現代社会における加齢人間工学研究の意義を概説するとともに、本科目の位置づけ、授業の進め方、到達目標等を説明します。 第2回：視覚特性の加齢変化 加齢に伴って生じる視覚特性の変化とその影響について説明します。 第3回：聴覚特性の加齢変化 加齢に伴って生じる聴覚特性の変化とその影響について説明します。 第4回：触覚・温熱感覚・身体特性の加齢変化 加齢に伴って生じる触覚・温熱感覚・身体特性の変化とその影響について説明します。 第5回：認知特性の加齢変化 加齢に伴って生じる認知特性の変化とその影響について説明します。 第6回：加齢人間工学の技術基準と国内外の施策 加齢変化を考慮した製品・サービス・環境等の設計に使用される技術基準（規格等）及び国内外の施策について説明します。 第7回：加齢人間工学の応用例 加齢変化を考慮して設計された製品・サービス・環境等の実例を紹介します。 第8回：まとめ：加齢人間工学の発展的応用 加齢人間工学に残された問題と今後の展開について議論します。													
教科書 なし													
参考文献 「アクセシブルデザイン～高齢者・障害者の知覚・認知特性に配慮した人間中心のデザイン～」(株) エヌ・ディー・エス													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>加齢人間工学の知識の実践的応用力を評価します。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>毎回の授業で提出を求めるレビューシートの内容の充実度を評価します。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	加齢人間工学の知識の実践的応用力を評価します。	平常点評価	50%	毎回の授業で提出を求めるレビューシートの内容の充実度を評価します。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	加齢人間工学の知識の実践的応用力を評価します。											
平常点評価	50%	毎回の授業で提出を求めるレビューシートの内容の充実度を評価します。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 各回のレビューシートに対して、その次の回の授業にてフィードバックを行います。また、必要に応じて、Waseda Moodle のお知らせ機能などを通じたフィードバックを行います。 なお、加齢人間工学に対する受講者の知識レベルや関心によっては、上記講義形式の授業に代えて、文献の輪読形式の授業とすることがあります。													

授業科目名： 認知心理学特論	担当教員名： 杉森 絵里子												
授業の概要 認知心理学の分野で扱われている「視覚・感性認知」「注意」「記憶（ワーキングメモリ）」「言語理解」「意思決定」「認知と感情」「社会的・文化的認知」について、基本的な知識を学んだ後、具体的に最新の研究論文を読んで発表する機会を設ける。関連領域とのかかわり、日常生活への応用可能性、現時点での限界、限界を解決するための方法について考え、議論し、自己と他者を科学的に理解しようとする姿勢を持つ機会を設ける。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学術論文を講読できる (Aa5-1, Ac5-1) ・ 認知心理学研究の現時点での限界について適切な表現方法で意見を交わすことができる (E56-2, F56-2) ・ 日常生活への応用可能性について提案できる (D56-2) 													
授業計画 第1回：授業の進め方・視覚感性認知 第2回：注意 第3回：記憶 第4回：言語理解 第5回：意思決定 第6回：認知と感情 第7回：社会的・文化的認知 第8回：まとめ													
教科書 使用しません。													
参考文献 箱田 裕司・都築 誉史・川畑 秀明・萩原 滋 (2010) 認知心理学(New Liberal Arts Selection) 有斐閣													
成績評価方法 <table> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>興味のあるトピックに最新論文を読んでまとめる。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業中の発表を重視します。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	50%	興味のあるトピックに最新論文を読んでまとめる。	平常点評価	50%	授業中の発表を重視します。	その他	%	
試験	%												
レポート	50%	興味のあるトピックに最新論文を読んでまとめる。											
平常点評価	50%	授業中の発表を重視します。											
その他	%												
備考・関連URL													

授業科目名： 情報メディア教育論ゼミ（2） A	担当教員名： 森田 裕介												
授業の概要 情報メディア教育論では、テクノロジーによる新しい学習方法の提案（テクノロジープッシュ）や、教育実践における問題点に対する改善の提案（リクワイアメントプル）を行う。そのため、教育システム、ツール、コンテンツを実際に開発できるスキルが必要となる。また、開発したシステム等を評価するための知識とスキルも必要である。(2)A では、拡張現実（AR：Augmented Reality）の技術を使ったコンテンツを実際にデザイン、作成、評価し、研究の基盤となる概念や考え方について理解する。													
授業の到達目標 (1) 研究の基盤となる概念や考え方について理解、探究することができる。 (2) 自身でコンテンツを作成するスキルを習得する。 中目標：C6-1, C6-2													
授業計画 第1回：導入 オリエンテーション 第2回：ARを用いた教育工学的研究の事例 研究事例を参考にアイデアを構想する 第3回：テクノロジープッシュによるデザイン（1） テクノロジープッシュの視座からデザインを考案する 第4回：リクワイアメントプルによるデザイン（2） リクワイアメントプルの視座からデザインを考案する 第5回：構想発表 構想発表を行う。 第6回：AR コンテンツ作成方法（1） AR コンテンツの作成方法について学ぶ 第7回：AR コンテンツの作成方法（2） AR コンテンツの作成方法について学ぶ 第8回：AR コンテンツの作成方法（3） AR コンテンツの作成方法について学ぶ 第9回：AR コンテンツの作成（1） 実際にAR コンテンツを作成する 第10回：AR コンテンツの作成（2） 実際にAR コンテンツを作成する 第11回：中間報告 中間発表を行う 第12回：AR コンテンツの評価（1） AR コンテンツを実際に利用し評価を行う 第13回：AR コンテンツの評価（2） AR コンテンツを実際に利用し評価を行う 第14回：成果発表 成果をまとめて発表する 第15回：総括 改善点に関する議論													
教科書 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する場合がある。													
参考文献 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する。													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>20%</td> <td>発表資料</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>実習への取り組み</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>30%</td> <td>成果発表、ゼミへの貢献度</td> </tr> </table>		試験	%		レポート	20%	発表資料	平常点評価	50%	実習への取り組み	その他	30%	成果発表、ゼミへの貢献度
試験	%												
レポート	20%	発表資料											
平常点評価	50%	実習への取り組み											
その他	30%	成果発表、ゼミへの貢献度											
備考・関連URL ・コンピュータを用いた演習を行うため、ソフトウェアをインストールする場合がある。 ・授業順序、取り扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。・世界の教育動向を学ぶため、海外合宿研修（参加任意）を実施する。渡航先は未定である。また、複数回実施する場合がある。													

授業科目名： 情報メディア教育論ゼミ（2） B	担当教員名： 森田 裕介												
授業の概要 情報メディア教育論では、テクノロジーによる新しい学習方法の提案（テクノロジープッシュ）や、教育実践における問題点に対する改善の提案（リクワイアメントプル）を行う。そのため、教育システム、ツール、コンテンツを実際に開発、作成できるスキルが必要となる。また、開発したシステム等を評価するための知識とスキルも必要である。(2)B では、仮想現実（VR:Virtual Reality）の技術を使った仮想学習環境を実際にデザイン、作成、評価し、研究の基盤となる概念や考え方について理解する。なお、本年度の機械器具費（視線計測装置）が認められた場合は、従来の行動分析や主観評価だけでなく、生体情報（視線）を用いた分析についても演習に取り入れていく。													
授業の到達目標 (1) 研究の基盤となる概念や考え方について理解、探究することができる。 (2) 自身でコンテンツを作成するスキルを習得する。 中目標：B56-3, B56-4													
授業計画 第1回：導入 オリエンテーション 第2回：仮想学習環境（MUVE） 仮想学習環境（MUVE）を用いた教育工学研究の事例 第3回：デザイン（1） テクノロジープッシュによるデザイン（1） 第4回：デザイン（2） リクワイアメントプルによるデザイン（2） 第5回：構想発表 構想発表 第6回：MUVE 開発の方法（1） MUVE の作成方法（1） 第7回：MUVE 開発の方法（2） MUVE の作成方法（2） 第8回：MUVE 開発の方法（3） MUVE の作成方法（3） 第9回：MUVE 開発（1） MUVE の作成（1） 第10回：MUVE 開発（2） MUVE の作成（2） 第11回：中間発表 中間報告 第12回：MUVE の評価（1） MUVE の評価（1） 第13回：MUVE の評価（2） MUVE の評価（2） 第14回：成果発表 成果発表を行う 第15回：総括 改善点に関する議論													
教科書 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する場合がある。													
参考文献 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する。													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>20%</td> <td>発表資料</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>実習への取り組み</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>30%</td> <td>成果発表、ゼミへの貢献度</td> </tr> </table>		試験	%		レポート	20%	発表資料	平常点評価	50%	実習への取り組み	その他	30%	成果発表、ゼミへの貢献度
試験	%												
レポート	20%	発表資料											
平常点評価	50%	実習への取り組み											
その他	30%	成果発表、ゼミへの貢献度											
備考・関連URL ・コンピュータを用いた演習を行うため、ソフトウェアをインストールする場合がある。 ・授業順序、取り扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。・世界の教育動向を学ぶため、海外合宿研修（参加任意）を実施する。渡航先は未定である。また、複数回実施する場合がある。													

授業科目名： 技術史・技術文化論ゼミ（1） A	担当教員名： 余語 琢磨
授業の概要 人間が物質的存在（道具・生産物、身体、環境資源など）に何かを働きかけるにあたり、そこに必ずある種のプラン（技術）やルール（文化）が介在しつつ、モノとヒトを関係づけていくことになる。そこで本ゼミでは、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などに潜在する技術と文化の問題をテーマに、関連する文化人類学・民俗学・歴史学・考古学の著作・研究論文を精緻かつ批判的に分担講読しながら（文献は受講生の関心に合わせて柔軟にアレンジする）、技術／テクノロジーおよび生活文化研究の方法と意義について理解する。	
授業の到達目標 ・関連基本文献を批判的に検討し、自らの研究対象・テーマ・方法を具体的に構想することができる（B56-4）。	
授業計画 第1回：オリエンテーション：本演習の目的・概要と進行・分担の確認 第2回：研究資料の探索法：国内外の情報資源・関連文献の検索・収集方法について 第3回：文献講読（1）：ものづくりのエスノグラフィ 第4回：討論（1）：伝統的生産技術について 第5回：文献講読（2）：The Oxford Handbook of Material Culture Studies 第6回：討論（2）：文化人類学と考古学をむすぶ物質文化研究の視座について 第7回：文献講読（3）：Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine 第8回：討論（3）：民俗知と科学、伝統技術とテクノロジー、および民俗医療について 第9回：文献講読（4）：民族考古学のエスノグラフィから 第10回：討論（4）：フィールドワークと歴史学の接合について 第11回：文献講読（5）：テクノロジーのエスノグラフィから 第12回：討論（5）：近代における生産技術と情報について 第13回：文献講読（5）：技術哲学・科学技術批判論 第14回：討論（5）：技術研究の意義をフィールドから問い直す 第15回：議論の整理：基本文献の批判と整理から修士論文構想へ	
教科書 ・Dan Hicks and Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies ・Helaine Selin (Ed.) 2008 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures (2nd edition)	
参考文献 テーマごとに紹介するが、受講生自らも関連文献を検索しながら採り上げること。	
成績評価方法 試験 % レポート 50% 授業で発表する報告・プレゼンテーション等の内容により評価する。 平常点評価 50% ディスカッションや研究実践への積極性、および時期に応じた研究課題の達成度により評価する。 その他 %	
備考・関連URL なお、受講生の過去の調査研究経験に応じて、国内外のフィールドワークや資料（史料）調査の実践的指導を行うために、学部生と合流または院ゼミ単独で調査実習への参加を求めることがある（実習を行う場合、時期は夏季～秋ごろ、実習費用は一部自己負担となる予定である）。	

授業科目名： 技術史・技術文化論ゼミ（1） B	担当教員名： 余語 琢磨
授業の概要 ゼミ（1）A に引き続き、ものづくり／わざ、生業、衣食住、民俗・現代医療などのなかに潜在する技術と文化の問題について、研究視点を探究する。加えて、修士論文に関するテーマ探索・対象情報の収集を進め、関連研究の批判的検討や調査方法論に関する文献講読を通じて研究デザインを鍛えながら、2年次に移行する春からのフィールドエントリーが実現するように準備を進める。	
授業の到達目標 ・調査対象となるフィールド・資料に関する、客観的かつ多角的な予備情報を収集することができる（G36－4）。 ・フィールドエントリーにあたり、複眼的で適切かつ柔軟な調査方法・項目をデザインできる（B56－4）。	
授業計画 第1回：オリエンテーション：本演習の目的・概要と進行・分担の確認 第2回：研究上の「問い」について 第3回：研究上の「対象」とフィールド・資料について 第4回：研究モデルの探索（1）：技術史・ものづくり／わざ研究 第5回：研究モデルの探索（2）：生業・生活文化史研究 第6回：研究モデルの探索（3）：伝統的民俗医療・医療人類学 第7回：修士論文計画発表会（1） 第8回：調査方法の設定（1）：対象とフィールドの情報と仮説 第9回：調査方法の設定（2）：空間観察・行動観察の技法 第10回：調査方法の設定（3）：インタビュー・テキスト分析の技法 第11回：修士論文計画発表会（2） 第12回：調査データの収集・分析（1）：映像・画像の活用方法 第13回：調査データの収集・分析（1）：フィールドノートの作成方法 第14回：調査データの収集・分析（1）：データの分析とフィールドにおける仮説修正 第15回：フィールドエントリーの準備について	
教科書 ・Dan Hicks and Mary C. Beaudry (eds.) 2010 The Oxford Handbook of Material Culture Studies ・Helaine Selin (Ed.) 2008 Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western Cultures (2nd edition)	
参考文献 テーマごとに紹介するが、受講生自らも関連文献を検索しながら採り上げること。	
成績評価方法 試 験 % レポ ー ト 50% 授業で発表する報告・プレゼンテーション等の内容により評価する。 平常点評価 50% ディスカッションや研究実践への積極性、および時期に応じた研究課題の達成度により評価する。 そ の 他 %	
備考・関連 URL なお、受講生の過去の調査研究経験に応じて、国内外のフィールドワークや資料（史料）調査の実践的指導を行うために、学部生と合流または院ゼミ単独で調査実習への参加を求めることがある（実習を行う場合、時期は夏季～秋ごろ、実習費用は一部自己負担となる予定である）。	

授業科目名： 情報メディア教育論ゼミ（1） A	担当教員名： 森田 裕介
授業の概要 情報メディア教育論では、教育工学の研究方法をベースに、関連する領域を俯瞰しつつ、テクノロジーによる教育改善のプロセスを探究していく。(1)A では国内外の教育工学関連の文献を批判的に読解し、研究の基盤となる概念や考え方について理解する。	
授業の到達目標 (1) 国内外の先行研究を、批判的に読解することができる (B56-4) (2) 研究の基盤となる概念や考え方について理解、探究することができる (C5-1)	
授業計画 第1回：導入 オリエンテーション 第2回：教育工学 文献（1）「教育工学とは」 第3回：議論 議論（1）学習観の変遷 第4回：学習科学 文献（2）「How People Learn?」 第5回：議論 議論（2）教授と学習 第6回：21世紀スキル 文献（3）「Assessment and Teaching of 21 Century Skills」 第7回：議論 議論（3）21世紀型スキル 第8回：中間まとめ まとめ 第9回：STEM教育 文献（4）「Next Generation Science Standards」 第10回：議論 議論（4）STEM教育 第11回：テクノロジーを活用した教育 文献（5）「Rethinking Education in the Age of Technology」 第12回：議論 議論（5）教育とテクノロジー 第13回：教育イノベーション 文献（6）「Disrupting Classroom」 第14回：議論 議論（6）教育とイノベーション 第15回：まとめ 総括	
教科書 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する場合がある。	
参考文献 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する。	
成績評価方法 試 験 % レポ ー ト 50% 文献の要約、発表資料 平常点評価 20% 出席 そ の 他 30% ゼミへの貢献度	
備考・関連 URL ・文献、授業順序、取り扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。・世界の教育動向を学ぶため、海外合宿研修（参加任意）を実施する。渡航先は未定である。また、複数回実施する場合がある。	

授業科目名： 情報メディア教育論ゼミ（1） B	担当教員名： 森田 裕介
授業の概要 情報メディア教育論では、教育工学の研究方法をベースに、関連する領域を俯瞰しつつ、テクノロジーによる教育改善のプロセスを探究していく。(1)Bでは、国内外のアクティブラーニングやゲーム学習に関する文献を批判的に読解し、研究の基盤となる概念や考え方について理解する。なお、本年度の機械器具費（視線計測装置）が認められた場合は、従来の行動分析や主観評価だけでなく、生体情報（視線）を用いた分析についても演習に取り入れていく。	
授業の到達目標 (1) 国内外の先行研究を、批判的に読解することができる (B56-4) (2) 研究の基盤となる概念や考え方について理解、探究することができる (C5-1)	
授業計画 第1回：導入 オリエンテーション 第2回：学びの実践共同体 文献（1）「Cultivating Communities of Practice」 第3回：議論 議論（1）学びの実践共同体 第4回：デジタルネイティブ 文献（2）「Teaching Digital Natives」 第5回：議論 議論（2）デジタルネイティブ 第6回：ゲーム学習 文献（3）「Digital Game-Based Learning」 第7回：議論 議論（3）ゲーム学習 第8回：中間まとめ まとめ 第9回：仮想学習環境 文献（4）「Reality is Broken」 第10回：議論 議論（4）MMORPG 第11回：シリアスゲーム学習 文献（5）「シリアスゲーム」 第12回：議論 議論（5）学習におけるゲーム 第13回：学習評価 文献（6）「Stealth Assessment」 第14回：議論 議論（6）ゲーム学習の評価 第15回：まとめ 総括	
教科書 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する場合がある。	
参考文献 履修者の研究内容や学習状況に応じて、適宜指定する。	
成績評価方法 試 験 % レポート 50% 文献の要約、発表資料 平常点評価 50% ゼミへの貢献度 その他 %	
備考・関連 URL ・文献、授業順序、取り扱う割合は、履修者の学習状況によって変更する場合がある。・世界の教育動向を学ぶため、海外合宿研修（参加任意）を実施する。渡航先は未定である。また、複数回実施する場合がある。	

授業科目名： 情報メディア教育特論	担当教員名： 森田 裕介												
授業の概要 本授業は、情報メディアを活用した教育の事例を参照し、教育工学研究の視点から、問題の所在、有用性、改善点について議論を行います。 ※フルオンデマンドで行いますので、備考欄をご参照の上、受講してください。													
授業の到達目標 (1) 情報メディアを活用した教育の現状を把握し、情報技術が教育に与える影響を理解する。 (2) 情報メディアを活用した事例を体験的に学び、学習者特性の観点から有用性と問題点について議論するとともに、改善点を示すことができる。 中目標：B56-3, C5-1, E56-2													
授業計画 第1回：オリエンテーション 本講義の目的と概要について説明します。 第2回：教育とテクノロジー 教育とテクノロジーに関する資料をもとに、議論を行います。 第3回：教授と学習 教授と学習について、議論を行います。 第4回：アクティブラーニング アクティブラーニングについて、議論を行います。 第5回：協調学習 協調学習について、議論を行います。 第6回：ゲーム学習 ゲーム学習について、議論を行います。 第7回：オンライン学習 オンライン学習について、議論を行います。 第8回：総括 全体を総括します。													
教科書													
参考文献													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>60%</td> <td>情報メディアを活用した教育の基盤となる考え方や、発展可能性、有用性などについて論理的に述べることができる。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>40%</td> <td>BBSにおいて、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	60%	情報メディアを活用した教育の基盤となる考え方や、発展可能性、有用性などについて論理的に述べることができる。	平常点評価	40%	BBSにおいて、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。	その他	%	
試験	%												
レポート	60%	情報メディアを活用した教育の基盤となる考え方や、発展可能性、有用性などについて論理的に述べることができる。											
平常点評価	40%	BBSにおいて、積極的に発言したり活動に貢献したりすることができる。											
その他	%												
備考・関連URL <ul style="list-style-type: none"> ・毎週課題の提出を求めます。・毎週オンデマンドコンテンツを視聴する必要があります。 ・対面授業はありませんが、月曜もしくは木曜に対面での質問等を受け付けております。 ・授業の順序は、状況によって変更する場合があります。 ・レポート内容を共有、公開する場合があります。 													

授業科目名： メディアコミュニケーション特論	担当教員名： 保崎 則雄
授業の概要 受講生の当該領域の知識、経験に応じて、Media Literacy 研究、Media Communication, Language Communication 研究がどのように行われているのかということを理解する。ML 育成の方法とカリキュラムの可能性を論文輪読をし、実際のテレビ CM など进行分析しつつ、研究課題としてのフォーマットにまとめることを試みる。また、具体的な研究・実践活動として、生体情報データを扱うような視線運動分析、視聴調査、広告の discourse 分析などの例を紹介しつつ、解釈学的な視点、評価分析の視点、さらに製作、創造的な視点を紹介する予定である。同時にメディアを利用した言語教育というものも最新のトピックを中心に紹介する。 詳細は、授業開始前に連絡します。	
授業の到達目標 受講生は、Media Literacy, Media Communication, Language Communication の基本的な理解を踏まえて、研究課題（メディア比較、メディアテキスト分析、映像分析、オーディエンス分析、教育・社会での評価、生産・流通過程の分析、言語教育）を先行研究をもとに現実社会の問題として解決、解明することができるようになる。 受講生の人数にもよるが、プロジェクト遂行においては自分の考えを基盤とし、且つ、グループでの協働作業を通してメディア研究を実践できるようになる。	
授業計画 第1回：授業紹介（課題、評価などについて）各自の先行知識を確認する 輪読用の論文の紹介と受講生の興味について意見交換をする 第2回：指定論文の口頭報告を行う 受講生が選んだ研究論文を読み、oral report を行う 第3回：指定論文の口頭報告を行う 受講生が選んだ研究論文を読み、oral report を行う 第4回：指定論文の口頭報告を行う 受講生が選んだ研究論文を読み、oral report を行う 第5回：指定論文の口頭報告を行う 受講生が選んだ研究論文を読み、oral report を行う 第6回：指定論文の口頭報告を行う 受講生が選んだ研究論文を読み、oral report を行う 第7回：各自のプロジェクトの発表とディスカッション 第8回：各自のプロジェクトの発表とディスカッション 授業評価	
教科書 No single textbook 特に指定せず	
参考文献 メディア論 マクルーハン みすず書房 Media Literacy : New Agendas in Communication Edited by Kathleen Tyner 2010 College of Communication "The Discourse of Advertising" 2nd ed. by Guy Cook 2001 ROUTLEDGE Other articles (to be distributed in class)	
成績評価方法 試 験 % N.A. 該当せず レポート 50% Final paper レポート 平常点評価 30% Attendance 出席 その他 20% Project presentation プロジェクトのプレゼンテーション	
備考・関連URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">大気環境科学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">松本 淳</p>												
授業の概要 大気環境科学の基礎概念のうち、特にラジカル種が関与する大気化学反応について対流圏オゾンを中心に講義する。1970年代以降対策が強化されているものの、対流圏オゾンは近年も増加傾向を示している。オゾンの前駆体である窒素酸化物と揮発性有機化合物、連鎖反応にて重要なラジカル種、の挙動や測定法を知り、ごくわずかしかな存在しない微量成分が重要な影響を及ぼしている大気環境問題を考える。[Atmospheric Environmental Sciences]													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・対流圏における大気微量成分の挙動に関する基礎理論を理解できるようになる (B56-3) ・最近の大気化学の研究動向を知る (C5-1) 													
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） / 本講義の目的と概要について説明します。 第2回：大気化学反応の基礎 / 気体成分の量と単位、気体分子反応論、大気ラジカル。 第3回：対流圏オゾン / ラジカル連鎖反応、オゾン生成機構、対流圏オゾンによる環境問題の概説。 第4回：大気中の窒素酸化物 / 種類、発生源、対流圏における反応、大気からの消失。 第5回：揮発性有機化合物 / 種類、発生源、対流圏における反応、大気寿命。 第6回：大気微量成分の測定法 / オゾン、窒素酸化物、揮発性有機化合物。 第7回：総合的な考察と研究体験 / 定点観測データの解釈を体験する、観測機器に触れる。 第8回：本講義の補足とまとめ / 最近の研究動向、関連する話題（例：PM2.5の近況や注意点）、等。													
教科書 事前学習を含めて、大気環境化学の基礎事項を理解するために、指定する： <ul style="list-style-type: none"> ・松本淳「はじめての大気環境化学」（コロナ社） 													
参考文献 講義において随時紹介する。													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>各自が資料・文献等を調査した成果を要約し報告するレポートを評価する。講義内容に基づいて基礎理論や文献の内容・目的を正しく理解しているか、およびそれらをわかりやすく報告できるか、等を評価の対象とする。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業中に実施することのある「練習問題」や「課題」を含めて、授業への取り組みの姿勢および理解度を評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	各自が資料・文献等を調査した成果を要約し報告するレポートを評価する。講義内容に基づいて基礎理論や文献の内容・目的を正しく理解しているか、およびそれらをわかりやすく報告できるか、等を評価の対象とする。	平常点評価	50%	授業中に実施することのある「練習問題」や「課題」を含めて、授業への取り組みの姿勢および理解度を評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	各自が資料・文献等を調査した成果を要約し報告するレポートを評価する。講義内容に基づいて基礎理論や文献の内容・目的を正しく理解しているか、およびそれらをわかりやすく報告できるか、等を評価の対象とする。											
平常点評価	50%	授業中に実施することのある「練習問題」や「課題」を含めて、授業への取り組みの姿勢および理解度を評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 【課題等に対するフィードバックについて】 毎回の練習問題等については、翌週以降の講義時間内に解説する。 最終レポートの解説や授業全体の講評は、最終授業の時間内に実施する。 【対話型・問題発見・解決型教育の手法】 無し 【教室外実習前の留意点】 教室外実習無し													

授業科目名： 動物保全生態学特論	担当教員名： 風間 健太郎												
授業の概要 近年人間活動の影響により多くの生態系機能や生態系サービスが急速に喪失している。今後も人間が生態系を健全に利用するためには、野生動物の生態系機能や生態系サービスの価値を正確に評価し、その維持に必要な生態系管理策の構築が必要とされる。この科目では、野生動物の生態系機能や生態系サービスの解明とその価値評価事例について講義し、その活用と保全を両立するために不可欠な生態系管理方策について保全生態学的見地から議論する。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・生態系の持続的利用に不可欠な生態系機能やサービスの概念を理解できる (C5-1, B56-3)。 ・健全な生態系利用と保全管理方策を科学的見地から提案できる (D56-2)。 ・野生動物保全に関する科学的命題と価値的命題を峻別し、多様な価値観を尊重しながら自身の意見を論理的に陳述できる (E56-2, G36-5, F56-2)。 													
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） 本講義の目的と概要について説明する 第2回：生物多様性と生態系機能・サービス 生物多様性維持機構とその保全の意義を説明する 第3回：生態系保全における科学的命題と価値的命題（1） 人間活動と野生動物との軋轢事例を紹介しその自然科学と社会科学的側面を説明する 第4回：生態系保全における科学的命題と価値的命題（2） 人間活動と野生動物との軋轢事例を紹介しその自然科学と社会科学的側面を説明する 第5回：野生動物保全や管理に関する時事問題についてのディベート 例えば害獣・害鳥管理、外来種駆除、自然エネルギーや水産資源管理について討論する 第6回：野生動物保全や管理に関する時事問題についてのディベート総括 前回実施されたディベートを総括し、意見陳述の改善点を議論する 第7回：生態系保全管理における意見陳述演習 生物保全管理政策に対するパブリックコメントを模擬的に作成する 第8回：生態系保全管理における意見陳述の総括 前回提案されたパブリックコメントについて議論し、講義全体を総括する													
教科書 なし													
参考文献 「人間活動と生態系」（日本生態学会編）、共立出版													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>20%</td> <td>授業中に提示する課題に対し、各自が文献・資料等を調査してまとめたレポートを評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>80%</td> <td>授業への取り組み、とくに討論や意見陳述に対する積極性を評価する</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	20%	授業中に提示する課題に対し、各自が文献・資料等を調査してまとめたレポートを評価する。	平常点評価	80%	授業への取り組み、とくに討論や意見陳述に対する積極性を評価する	その他	%	
試験	%												
レポート	20%	授業中に提示する課題に対し、各自が文献・資料等を調査してまとめたレポートを評価する。											
平常点評価	80%	授業への取り組み、とくに討論や意見陳述に対する積極性を評価する											
その他	%												
備考・関連 URL Course N@vi のお知らせ機能等を通じて提出されたレポートのフィードバックを行う。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">生態モデリング特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">横沢 正幸</p>
授業の概要 生態系の時空間動態や環境変化に対して系がどのように応答するかを解析するために利用されるモデリングの諸技法について解説する。具体的には、生態系を構成する要素間および環境との相互作用、そして個体ではなく系として現れる振る舞いについて、素過程やデータに内包する不確実性を考慮しながらモデルを構成して解析する場合に基本となる確率・統計的な手法（ベイズ推論、モンテカルロ法、データ同化など）について解説する。また最新の研究トピックからモデリングと解析の具体例についても解説する。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・統計モデリングの基礎を理解し具体的課題に適用できる。 ・生態系における生物体と環境との相互作用過程が定量的に捉えられる。 Ad56-2, Ad56-3, Ad56-4, B56-1, B56-3, B56-4	
授業計画 第1回：導入 統計モデリングの概要 第2回：ベイズ統計学の基礎 ベイズの定理、事前・事後分布、尤度 第3回：モンテカルロ法の基礎 乱数、マルコフ過程、MCMC 第4回：状態空間モデル システムモデル、観測モデル、グラフィカルモデル 第5回：フィルタリング 非線形フィルター、平滑化、拡大ベクトル 第6回：カルマンフィルター ローカルレベルモデル、アンサンブルカルマンフィルター、粒子フィルター 第7回：応用例1：植物群集動態モデル 植物群集の生産性推計に統計モデリングを応用した研究例を解説する。 第8回：応用例2：生態系炭素循環モデル 陸域生態系における炭素循環過程の解明に統計モデリングを応用した研究例を解説する。	
教科書 なし	
参考文献 樋口知之「予測に生かす統計モデリングの基本」講談社、その他、適宜講義内で紹介する。	
成績評価方法 試 験 % レポート % 平常点評価 100% 講義内容の理解度を直接評価する。 そ の 他 %	
備考・関連URL 各回講義の始めに前回のコメント、質問についてフィードバックを行う。	

授業科目名： 環境社会学特論	担当教員名： 井上 真
授業の概要 環境社会学は「なぜ」を問う数少ない学問分野です。そして、世の中の「常識」を常に疑い、環境問題への取り組みに対しても全体構造的な視点から批判的な検討を行い、そのうえで運動論を展開し、あるいは政策論として新たな提案へと結びつけます。具体的には、本講義では環境社会学会奨励賞を受賞した書籍（フィールドワークに基づく研究）を輪読します。フィールドワークと先行研究による既知の概念・理論とをどのように関連づけるのか、どのような思考プロセスを通して新たな知を創成するのか学ぶことになります。	
授業の到達目標 ・環境問題は誰にとつてのどんな「問題」なのか、またどのように解決へと導くことができるのかを社会的に考えることができるようになる。(B56-3) ・環境問題・環境利用の具体的な事例研究の成果を学ぶことで、環境社会学の応用的な知識や考え方を習得し、受講者自身が自らの研究のためフィールドワークを実施する際の研究視角や分析方法を身につけることができるようになる。(C6-2)	
授業計画 第1回 ガイダンス 講義概要の説明および担当箇所の決定をしたうえで、論文（井上真，2014）の解説をします。 第2回 序章 「対話」も「システム」も「正義」も成立しない現場で 第3回 1章 アイルランド農村という場所 第4回 2章 農村アクセス問題の歴史的展開 第5回 3章 私的所有地のレクリエーション利用をめぐる作法 第6回 4章 対話の場の限界と非常事態の生みだすもの 第7回 5章 いかに農地は公衆に開かれうるか 第8回 終章 複数的資源管理をめぐる日常実践の可能性	
教科書 北島義和，2018.『農村レクリエーションとアクセス問題—不特定の他者と向き合う社会学』京都大学学術出版会，237pp.	
参考文献 必要に応じて紹介します。 なお、ガイダンスで使用する論文は次の通り。 井上真，2014. 「黒子の環境社会学：地域実践，国家政策，国際条約をつなぐ」『環境社会学研究』20号：17-36.	
成績評価方法 試験 20% レポート 60% 担当箇所をまとめた発表資料（レジュメ）の内容を評価します。 平常点評価 40% 授業内での発言など積極性や貢献度を評価します。 その他 20%	
備考・関連URL 正当な理由なく発表を行わなかった場合や3回以上欠席した場合は、単位を認定することはできません。 フィードバック：毎回の発表に対してコメントします。	

授業科目名： 地域資源特論	担当教員名： 柏 雅之
授業の概要 (1) 地域問題とりわけ地域間格差が発生するメカニズムについて、現代のグローバル資本主義のメカニズムをおさえながら学んでいく。そのうち、農山村地域などを対象とした地域創生の論理について学ぶ。日本を中心に考えていくが、EU（欧州連合）での取組との対比も行う。 (2) 世界食料危機は来るのか?! 世界は飢えるのか?! この問題に対して環境科学や資源論と、主流派の経済学という対立する2つの視座から考えていく。その場合、食料大国である米国、カナダ、豪州などの農業資源危機（土壌と水）や枯渇性エネルギー依存型農業の問題点、また途上国での「緑の革命」の光と影などに焦点を当てながら根の深い危機的状況を明らかにしていく。 (3) 日本の「食」と「農」は大丈夫なのか?! フードシステム論や農業再生論の視座から考えていく。	
授業の到達目標 ①地域問題のメカニズムと地域創生の論理と実践、②世界の食料危機問題、③「食」の安全・安心の問題とフードシステム、④日本と世界の農村問題についての構造を理解することができる（B56-1）（B56-4）（C6-1）（D56-1）。	
授業計画 第1回：地域間格差問題 地域間格差拡大の問題のメカニズムを現代資本主義の特質をもとに学ぶ 第2回：地域創生の論理 地域創生のあり方に関する論理を日欧の比較を通して学ぶ 第3回：世界食料問題の構図 世界の食料危機問題を考える 第4回：世界は飢えるのか？ 食料問題をめぐる楽観論と悲観論とを対比して考えていく 第5回：食料超大国・北米や豪州の農業は持続可能なのか？ 食料超大国（北米や豪州など）の農業資源危機について学ぶ 第6回：途上国での「緑の革命」の光と影 緑の革命とは何だったのか？ はたして持続可能なのか？ その光と影を斬る 第7回：「食」を考える フードシステムと地域再生を考える 第8回：今後の展望 食、農、そして地域再生を考える	
教科書 とくには指定しない。	
参考文献 柏 雅之『現代中山間地域農業論』御茶の水書房、1994年。 柏 雅之『条件不利地域再生の論理と政策』農林統計協会、2002年。	
成績評価方法 試験 % レポート 50% 簡単なレポートを最後に提出してもらう。 平常点評価 50% 平常点による評価 その他 %	
備考・関連URL	

授業科目名： 開発援助実践学特論 I	担当教員名： 平塚 基志												
授業の概要 先進国と途上国の間における南北問題を理解し、どのような援助を先進国がすべきか、その概念と具体的な技術的手法の習得を目的としている。具体的には、途上国援助における社会開発、経済開発の違いを理解する。さらに、社会開発を中心に住民のケイパビリティを向上させるための援助方法のについて、理論と技術を学ぶ。													
授業の到達目標 開発援助に関する理論的な側面について理解することができる。また、実線に移すのに必要な技術を習得できる。													
授業計画 第1回：開発援助を必要とする背景 第2回：環境劣化を引き起こすメカニズム 第3回：社会的貧困と経済的貧困 第4回：貧困を引き起こす社会経済的構造 第5回：南北間格差と公平性 第6回：社会開発の歴史 第7回：環境ガバナンス 第8回：社会開発についてのまとめ													
教科書 講義中に配布します。													
参考文献 講義中に配布します。													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>70%</td> <td>最終回の授業において与えられた課題に対するレポートを提出する</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>30%</td> <td>議論への参加度合い</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	70%	最終回の授業において与えられた課題に対するレポートを提出する	平常点評価	30%	議論への参加度合い	その他	%	
試験	%												
レポート	70%	最終回の授業において与えられた課題に対するレポートを提出する											
平常点評価	30%	議論への参加度合い											
その他	%												
備考・関連URL 途上国の環境問題や貧困問題等の基本的な知識を必要とするため、関連する研究室に在籍しているか、関連する学部の講義（ヒトと陸上生態系等）の単位を取得していることが望ましい。なお、最終回で全体に対するフィードバックを行います。													

授業科目名： 老年社会福祉学ゼミ（2） A	担当教員名： 加瀬 裕子
授業の概要 先行研究を検証して、修士論文の課題に関連した研究計画を策定する方法を学ぶ。 各自のテーマにあわせて、調査を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。	
授業の到達目標 (1) 質的研究方法・量的研究方法を理解し、学術論文を的確に評価できるようになる。(Ac 6-1) (2) 研究目的にあわせた適切な研究方法を選択できるようになる。(C6-2)	
授業計画 第1回：授業の進め方について 第2回：量的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする 第3回：量的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする 第4回：質的研究方法について 1 各自が先行研究論文を題材にレポートする 第5回：質的研究方法について 2 各自が先行研究論文を題材にレポートする 第6回：質的研究方法について 3 各自が先行研究論文を題材にレポートする 第7回：Evidence-based research の方法について 1 第8回：Evidence-based research の方法について 2 第9回：倫理審査申請書の作成 第10回：各自で研究をデザインする 1 調査計画作成 第11回：各自で研究をデザインする 2 調査依頼の方法・倫理 第12回：各自で研究をデザインする 3 調査票作成 第13回：各自で研究をデザインする 4 調査票作成 第14回：各自で研究をデザインする 6 調査票作成 第15回：調査について報告	
教科書	
参考文献 ゴフィア・ブトゥリム著「ソーシャルワークとは何か」相川書房 1986 加瀬裕子著「認知症ケアマネジメント-行動・心理症状に対処する技法」ワールドプランニング社 2016 才木クレイグヒル滋子著「グランデッドセオリー・アプローチ-分析ワークブック-」日本看護協会出版会 2014	
成績評価方法 試 験 % レポ ー ト % 平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。 そ の 他 %	
備考・関連 URL	

授業科目名： 老年社会福祉学ゼミ（2） B	担当教員名： 加瀬 裕子
授業の概要 先行研究を検証して、修士論文の課題に関連したデータの収集と分析方法を学ぶ。 各自のテーマにあわせて、実証研究を進めると同時に互に研究の進展について報告・意見交換を行なう。	
授業の到達目標 ・質的研究方法・量的研究方法を体得し、研究目的にあわせた適切な研究を実施できるようになる。(B56-1)	
授業計画 第1回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフト SPSS の使用方法を学ぶ。 1 第2回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフト SPSS の使用方法を学ぶ。 2 第3回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフト SPSS の使用方法を学ぶ。 3 第4回：各自が収集したデータを資料として、解析ソフト SPSS の使用方法を学ぶ。 4 第5回：各自が収集したデータを資料として、質的分析方法を学ぶ。(演繹的方法) 1 第6回：各自が収集したデータを資料として、質的分析方法を学ぶ。(帰納的方法) 2 第7回：各自が収集したデータを資料として、質的分析方法を学ぶ。 3 第8回：調査結果の考察 1 第9回：調査結果の考察 2 第10回：調査結果の考察 3 第11回：学術論文の書き方 1 第12回：学術論文の書き方 2 第13回：学術論文の書き方 3 第14回：論文クリニック 1 第15回：論文クリニック 2	
教科書 特になし。	
参考文献 適宜、授業中に指示する。	
成績評価方法 試 験 % レポート % 平常点評価 100% 先行研究の読み込み、明確で実現可能な研究計画の策定、テーマの創造性、演習への貢献。 そ の 他 %	
備考・関連 URL	

授業科目名： 開発援助実践学特論 II	担当教員名： 平塚 基志												
授業の概要 国際協力機構（JICA）が JICA 筑波において実施している途上国の研修員向け授業（住民参加手法、農業耕作技術、水田技術、灌漑技術等）を、途上国からの研修員と共に受講する。参加する研修は、住民参加型の開発援助プログラム、農業技術の移転プログラムである。													
授業の到達目標 開発援助の具体的な手法を習得できる。また、途上国からの研修生とのコミュニケーションを通して、南北問題の実態を理解できるようになる。													
授業計画 第1回：熱帯林の現状 第2回：開発援助の事例 第3回：JICA の途上国からの研修員向け授業に関するガイダンス 第4回：JICA の授業を受講し、JICA の開発援助の現状を把握し、プログラムについて学ぶ。 第5回：JICA の授業を受講し、住民参加の概念を習得する。 第6回：JICA の授業を受講し、住民参加を促す手法を学び、利点と問題点を理解する。 第7回：JICA の授業を受講し、途上国からの研修生と意見交換を行い、開発援助の必要性を学ぶ。 第8回：JICA の授業を受講およびレポートの提出する。													
教科書 講義中に配布します。													
参考文献 講義中に配布します。													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>％</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>40%</td> <td>JICA 研修後に提出する</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>30%</td> <td>議論への参加度合い</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>30%</td> <td>JICA での研修担当者による評価</td> </tr> </table>		試験	％		レポート	40%	JICA 研修後に提出する	平常点評価	30%	議論への参加度合い	その他	30%	JICA での研修担当者による評価
試験	％												
レポート	40%	JICA 研修後に提出する											
平常点評価	30%	議論への参加度合い											
その他	30%	JICA での研修担当者による評価											
備考・関連 URL 途上国の貧困問題や環境の知識を必要とするため、関連する研究室に在籍しているか、関連する講義（ヒトと陸上生態系等）の単位を取得していることが望ましい。また、約5日間にわたってつくば市にある JICA 筑波研修センターに通って講義を受ける必要がある。JICA での受講が難しい場合は、開発援助に関する追加の講義およびレポートにより代替する。なお、最終回で全体に対するフィードバックを行います。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">人口社会学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">武田 尚子</p>												
授業の概要 本授業では、江戸時代および明治期の「疫病と地域」に関する文献を講読、分析、考察し、レポートを提出する。日本の古典文法を習得し、江戸期、明治期の文書を読解、分析できる力が必要である。 また、地域社会の分析にあたっては、下記の文献と受講生の研究テーマが密接に関連していることが望ましい。受講生は登録後、授業開始前に、大学院における自分の研究テーマと、下記3点の文献のいずれかがどのように関連しているのかを説明したレポートを武田へ提出すること（受講前レポートは8千字以上） 【受講前に提出するレポートの課題図書】 <ul style="list-style-type: none"> ・細谷昂『家と村の社会学』御茶の水書房 ・広原盛明『日本型コミュニティ政策』晃洋書房 ・山口覚『集団就職とは何であったか』ミネルヴァ書房 大学院で「社会・経済」分野を専攻する院生を対象に、これまでの研究内容に社会学的視点（地域社会構造分析、地域移動による階層構造の変化）を導入することによって、より高度な社会学的分析が可能になることを目的にしています。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・講読した文献の内容について、社会学的意義が十分に理解できている。 ・講読した文献をもとに、研究方法を工夫する。 													
授業計画 第1回：授業内容について、ガイダンス 第2回：文献講読と調査方法の検討 1 第3回：文献講読と調査方法の検討 2 第4回：文献講読とデータ分析内容の検討 1 第5回：文献講読とデータ分析内容の検討 2 第6回：文献講読と知見の記述方法の検討 1 第7回：文献講読と知見の記述方法の検討 2 第8回：ディスカッション総括													
教科書 なし（講読文献は受講生と相談する）													
参考文献 授業中に適宜指示する。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td style="width: 80%;"></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>30%</td> <td>授業内容の理解度と応用力</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>70%</td> <td>授業内容の理解度と積極性</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	30%	授業内容の理解度と応用力	平常点評価	70%	授業内容の理解度と積極性	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	30%	授業内容の理解度と応用力											
平常点評価	70%	授業内容の理解度と積極性											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 履修予定者には（履修登録した者には）、開講前に提出が必要なレポート課題が指示される。本講義を受講する事前準備として、このレポート作成は必要である。大学の学部で「社会・経済」分野の卒論を書いたことがある水準の知識・経験を有していることを前提とし、大学院レベルの質的調査能力を高めるため、受講生全員のレベルをそろえるため、提出が必要なレポートである。													

授業科目名： 環境人類学特論	担当教員名： 原 知章
授業の概要 この授業では、環境人類学や開発人類学の研究史と近年の研究動向を把握する。特に、「環境」と「開発」の接点となるテーマに関する研究動向に焦点を当てる予定である。その上で、学生諸君には、各々が関心をもつ地域とテーマに関する論文について発表してもらおう。さらに、その論文・モノグラフの意義や課題などについて議論を行ないたい。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・環境人類学および開発人類学の研究史と近年の研究動向を説明することができる (C5-1)。 ・調査対象地域の論文を批判的に読むことができる (B56-4)。 ・質的調査の方法と論文の書き方を理解する (B56-3)。 	
授業計画 第1回：ガイダンス 授業概要や到達目標、進め方、本科目の位置づけなどを紹介する。配付資料の振り返りによる復習を求める。 第2回：環境人類学の研究史 環境人類学の研究史について説明する。書籍の事前読了および課題への取り組みによる予習と、配付資料の振り返りによる復習を求める。 第3回：文献発表(1) 環境人類学 2～3名の履修者に環境人類学に関連する文献を発表してもらい、ディスカッションを行なう。書籍の事前読了および課題への取り組みによる予習と、配付資料の振り返りによる復習を求める。 第4回：文献発表(2) 環境人類学 2～3名の履修者に環境人類学に関連する文献を発表してもらい、ディスカッションを行なう。書籍の事前読了および課題への取り組みによる予習と、配付資料の振り返りによる復習を求める。 第5回：開発人類学の研究史 開発人類学の研究史について説明する。書籍の事前読了および課題への取り組みによる予習と、配付資料の振り返りによる復習を求める。 第6回：文献発表(3) 開発人類学 2～3名の履修者に開発人類学に関連する文献を発表してもらい、ディスカッションを行なう。書籍の事前読了および課題への取り組みによる予習と、配付資料の振り返りによる復習を求める。 第7回：文献発表(4) 開発人類学 2～3名の履修者に開発人類学に関連する文献を発表してもらい、ディスカッションを行なう。書籍の事前読了および課題への取り組みによる予習と、配付資料の振り返りによる復習を求める。 第8回：まとめ 全体のまとめを行なう。事前学習として、これまでの総復習を求める。	
教科書 なし	
参考文献 授業時に紹介する	
成績評価方法 試 験 % レポート % 平常点評価 100% 授業内の発言や授業時に課す課題の達成度を総合して評価する そ の 他 %	
備考・関連 URL <ul style="list-style-type: none"> ・この授業は、文化人類学に関する基礎知識を持っていることを前提にしています。 ・この授業では、多くの日本語文献を講読します。 ・この授業では、履修者のみなさんに、2回以上のプレゼンテーションをしてもらう予定です (パワーポイントの資料を作成してもらいます)。 ・最終授業時に、全体に対するフィードバックを行ないます。 	

授業科目名： 国際社会学特論	担当教員名： 樋口 直人												
授業の概要 国際社会学は、日本の社会学において 1980 年代に提唱され、日本独自の下位分野として定着するようになった。これは、社会科学の自明な分析単位となってきた国民国家を見直し、従来の研究が見過ぎてきた社会現象の分析を目的とする点で、単なる社会学の一分野にとどまらない射程を持つ。この講義では、上記の目的に即した基本文献を可能な範囲で包括的に読むことにより、「複数性」「境界性」「越境性」という国際社会学の着眼点を理解できるようにする。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際社会学の基本的な問題関心を理解し、自らの研究に使えるツールを探ることができる。 ・ 社会科学の基本的な単位となってきた国民国家について、移民という観点から再考できる。 ・ 移民現象の分析を通じて、国家、市場、社会統合といった概念を独自の観点から捉えられる。 ・ 経済学や政治学、人類学の文献も取り上げるにより、学際的分野としての移民研究を理解する。 													
授業計画 第1回：イントロダクション、国際社会学をめぐる全体構図、取り上げるトピックについて討議 第2回：移民の発生（1）新古典派、ネットワーク論 第3回：移民の発生（2）歴史構造的アプローチ 第4回：移民と国民国家（1）入国と在留をめぐる問題 第5回：移民と国民国家（2）同化と多文化 第6回：移民と階級・階層 社会移動をめぐる問題 第7回：移民排斥という問題 第8回：国民国家を超える移民 トランスナショナルリズムの検討													
教科書 特定の教科書は指定しない。輪読のための文献リスト、その中で何を選定するかは初回に決める。													
参考文献 関連文献は多数あり、リストは初回に配布する。私の研究関心を知っていただくうえで、樋口『日本型排外主義』名古屋大学出版会、2014 年。梶田・丹野・樋口『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会、2005 年をあげておく。													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>課題レジュメに対して、読解の適切さ、それをふまえたコメントの質により評価を行う。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業への主体的参加（毎回発言を求める）、報告者へのコメントにより評価</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	課題レジュメに対して、読解の適切さ、それをふまえたコメントの質により評価を行う。	平常点評価	50%	授業への主体的参加（毎回発言を求める）、報告者へのコメントにより評価	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	課題レジュメに対して、読解の適切さ、それをふまえたコメントの質により評価を行う。											
平常点評価	50%	授業への主体的参加（毎回発言を求める）、報告者へのコメントにより評価											
そ の 他	%												
備考・関連 URL													

授業科目名： <p style="text-align: center;">家族社会学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">池岡 義孝</p>												
授業の概要 本講義では、日本の家族社会学の研究史を詳説する。対象とするのは、「家族社会学」という学問領域がまだ通常科学化していないなかで人類学や民俗学などとともに伝統的な家族である「家」の研究を行っていた戦前段階から、戦後それが通常科学化し「家族社会学」として独立し、現代家族の研究に取り組み研究成果を量産する段階、そして現実の家族の急激で大きな変動によって、家族社会学研究そのものも混迷を深めつつある現代までとする。また、日本の研究に影響を与えた欧米の研究についても、必要に応じて取り上げることにしたい。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・戦前から戦後、さらに現代に至るまでの家族社会学研究の研究史を理解する。 ・1つの学問領域の成立と展開を理解することができる。 ・受講生が専攻するそれぞれの研究領域において、その学問の成立と展開を比較検討できる。 													
授業計画 第1回：ガイダンス（本講義の概要と進め方） 第2回：家族の科学的研究の歴史的発達段階：欧米と日本の場合 第3回：戦前の家族研究：社会学および人類学・民族学による学際的な家族研究 第4回：戦後の家族社会学の再出発と通常科学化 第5回：批判的潮流1：マルクス主義的家族研究 第6回：批判的潮流2：人類学による家族・親族定義をめぐる批判 第7回：批判的潮流3：歴史学からする近代家族論 第8回：現代家族はどこにいくのか：家族の個人化、多様化論批判													
教科書 池岡義孝・西原和久編『戦後日本社会学のリアリティ：せめぎあうパラダイム』東信堂、2016年													
参考文献 各回の授業で、その都度指定する。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>70%</td> <td>最終レポートによって学習成果を評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>30%</td> <td>毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	70%	最終レポートによって学習成果を評価する。	平常点評価	30%	毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	70%	最終レポートによって学習成果を評価する。											
平常点評価	30%	毎回の報告やディスカッションで理解度および授業への積極性を評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連URL													

授業科目名： <p style="text-align: center;">都市社会学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">浅川 達人</p>												
授業の概要 我々が暮らす現代社会は、「都市」社会である。したがって、現代社会を調査・研究するためには、都市社会学の理論および研究方法についての知識が必要不可欠となる。この講義では、都市社会学の基礎を学ぶとともに、各人の研究テーマ・研究課題に即したその応用のための最低限の分析手法を習得することを目的とする。													
授業の到達目標 (1) 都市社会学の学問的性格を理解する (B56-3)。 (2) 都市社会学を自らの研究テーマに活用し、あるいは研究上の新たな着想を得るための材料とすることができる (C6-2)。													
授業計画 第1回：シカゴ学派都市社会学 第2回：アーバニズム理論の展開 第3回：東アジアの都市 第4回：日本の都市社会学 第5回：東京大都市圏の空間形成とコミュニティ 第6回：格差社会と都市空間 第7回：都市のフードデザート問題、鉄道交通の社会学 第8回：まとめ													
教科書 講義の際に指示する													
参考文献 講義の際に指示する													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td style="width: 80%;"></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>70%</td> <td>学期末に提出するレポートによる</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>30%</td> <td>出席状況による</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	70%	学期末に提出するレポートによる	平常点評価	30%	出席状況による	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	70%	学期末に提出するレポートによる											
平常点評価	30%	出席状況による											
そ の 他	%												
備考・関連 URL													

授業科目名： 移民研究特論	担当教員名： 森本 豊富
授業の概要 国内外の移民研究の動向を把握するために、各週のテーマに沿った和文・英文の学術論文を読み、批判的に考察して授業で議論する。また、個々の関心にあわせた移民関連書籍のレビューを書き、発表する。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・日本および海外の移民研究の理論、研究法、動向を理解できる。 ・移民研究の学際性について知る。 ・移民研究に関する論文を批判的に読み、自身の調査研究に活かすことができる。 	
【中目標No.】 B56－1、2、3、4、C6－1、D56－1、E56－2、F56－1	
授業計画 第1回：オリエンテーション 第2回：近年の移民研究の動向 第3回：日本の移民研究（1） 第4回：日本の移民研究（2） 第5回：海外の移民研究（1） 第6回：海外の移民研究（2） 第7回：書評の提出及び口頭発表（1） 第8回：書評の提出及び口頭発表（2）	
教科書 適宜、課題論文を配布する。	
参考文献 移民研究会（2008）『日本の移民研究 動向と文献目録 I／II』明石書店 日本移民学会（2011）『移民研究と多文化共生』御茶の水書房 森本豊富・根川幸男（2012）『トランスナショナルな「日系人」の教育・言語・文化』明石書店 Vivienne Anderson and Henry Johnson eds. (2020) Migration, Education and Translation: Cross-Disciplinary Perspectives on Human Mobility and Cultural Encounters in Education Settings (Studies in Migration and Diaspora). Routledge.	
成績評価方法 試 験 % レポ ー ト 50% 論文のレビューと発表。 平常点評価 50% 授業への参加状況をもとに総合的に評価する。 そ の 他 %	
備考・関連URL	

授業科目名：	科学史・科学論特論	担当教員名：	加藤 茂生												
授業の概要 授業内容：近代日本の物理学者であり、また夏目漱石の薫陶を受けた文筆家でもあった寺田寅彦の科学思想について検討する。文学と科学との関係も含め、昭和戦前期の科学と社会について考察する。授業では寺田寅彦の随筆に基づいた具体的な細部の考察が中心となる。 授業方法：毎回、小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集』の指定された箇所を全員が読んできて、その内容についてディスカッションする。															
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・寺田寅彦の科学思想について理解する。 ・教科書的な科学観ではない、文学とも関わるような幅広い科学観を得る。 中目標 C6-2、E56-2、F56-2															
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：「どんぐり」ほか 第3回：「科学者と芸術家」ほか 第4回：「物理学と感覚」ほか 第5回：「蓄音機」ほか 第6回：「相対性原理側面観」ほか 第7回：「ルクレチウスと科学」ほか 第8回：総括的討論															
教科書 小宮豊隆編『寺田寅彦随筆集』第一巻（岩波文庫、1963年）。必ず購入すること。なお、1947年の初版は、1963年の改版とは頁が異なるので、利用しないこと。所沢図書館にあるのは1947年の初版なので使えない。															
参考文献 授業時に指示する。															
成績評価方法 <table> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>10%</td> <td>授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>90%</td> <td>テキストの理解力、洞察力、他者の思想への想像力で成績を評価する。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>				試験	%		レポート	10%	授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。	平常点評価	90%	テキストの理解力、洞察力、他者の思想への想像力で成績を評価する。	その他	%	
試験	%														
レポート	10%	授業を通じて得た知見に基づいて自分の考えを記述する。													
平常点評価	90%	テキストの理解力、洞察力、他者の思想への想像力で成績を評価する。													
その他	%														
備考・関連URL															

授業科目名： 技術史・技術文化研究特論	担当教員名： 余語 琢磨
授業の概要 暮らし（生活・生業）をめぐる人々の多様な営みを、技術・テクノロジーを切り口にどのように捉えるか、この難問を文化人類学と歴史学の交差点から複眼的に理解するために、基本文献および教員のフィールド研究例等を取りあげ、その着想、視座、方法論、データの記述、分析・考察の妥当性、成果と課題について概説する。また受講生には、関連主要研究の輪読・解題・ディスカッションを行ってもらおう。この作業を通して、日常性、歴史、技術、道具、身体、医療、心理、文化等をめぐる思考のリフレーミングが訪れることを期待する。	
授業の到達目標 ・技術・テクノロジーを切り口とする人類学・歴史的な知識・研究方法を専門的に理解している（B56-4）。 ・関連基本文献を批判的に検討し、自らの研究対象・テーマ・方法への応用を考えることができる（C6-1, 2）。	
授業計画 第1回：イントロダクション：技術／テクノロジーおよび文化の定義・概念 第2回：技術／テクノロジーへのまなざしの変遷史と主要な研究テーマ 第3回：「自然環境利用の技術」をめぐる 第4回：「ものづくりの技術」をめぐる 第5回：「身体と医療の技術」をめぐる 第6回：「テクノロジーと現代文化」をめぐる 第7回：「テクノロジーの生産と利用実践」をめぐる 第8回：総括：論点の整理と総合ディスカッション	
教科書 とくに指定しない。	
参考文献 授業時においてテーマごとに紹介する。	
成績評価方法 試験　　％ レポート　50％ 授業で得た知見に基づき、自らの研究への応用性を記述または発表する。 平常点評価　50％ 文献の理解力、プレゼンテーションにおける洞察力、およびディスカッションへの参加姿勢により評価する。 その他　　％	
備考・関連URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">儀礼・祝祭研究特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">竹中 宏子</p>												
授業の概要 機能主義的な儀礼研究、神話との関連性、儀礼・祝祭の身体性や政治性を中心的テーマに、儀礼・祝祭論の主要な論文を読解し（和文・欧文）、研究意義と限界を議論、そして考察を行う。この作業を通じて得られた知見を活かし、学生には実際の祭り（あるいは類似する文化現象）を分析し発表してもらい、議論を行う。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・（主に文化人類学的な）儀礼・祝祭の研究法を理解し、他領域における研究との比較検討を通して、儀礼・祝祭論の研究意義と限界を考察できる（B56－2） ・儀礼・祝祭研究の視座に基づき、実際の儀礼・祝祭の社会的用法について議論できる（C6－2） 													
授業計画 第1回：ガイダンス ー儀礼・祝祭論について、授業の進め方、授業で扱う文献の指定 第2回：テキスト読解を基にディスカッション（1） ー儀礼・祝祭の研究史 第3回：テキスト読解を基にディスカッション（2） ー機能主義的な儀礼研究 第4回：テキスト読解を基にディスカッション（3） ー儀礼祝祭の身体性 第5回：テキスト読解を基にディスカッション（4） ー儀礼祝祭の政治性 第6回：学生による研究発表およびディスカッション（1） 第7回：学生による研究発表およびディスカッション（2） 第8回：まとめと今後の展望 ー新たな儀礼祝祭研究の展開に向けて													
教科書 事前に、または初回の授業で指定する。													
参考文献 授業中に適宜紹介する。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td style="width: 80%;"></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>提出課題を評価する</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>テキストに関する発表と、授業内の発言内容や頻度を評価する</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	提出課題を評価する	平常点評価	50%	テキストに関する発表と、授業内の発言内容や頻度を評価する	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	提出課題を評価する											
平常点評価	50%	テキストに関する発表と、授業内の発言内容や頻度を評価する											
そ の 他	%												
備考・関連URL テキストに関する発表は最低一回行ってもらいますが、欠席などはしないこと。 履修生の興味の方向性を考慮するなどの理由により、授業の内容や扱う文献が予定とは異なる場合があります。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">政治思想史特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">村上 公子</p>												
授業の概要 ドイツの議会制民主主義国家体制確立までの歴史上の道程を再現した展示「Wege Irrwege Umwege」の再現学習カタログを参照しつつ、1848年の「市民革命」前夜から始まり、1990年、東西ドイツの「再統合」によって一応完成をみた、国民国家でありかつ議会制民主主義国家である「ドイツ連邦共和国」とはどのような国家かを学ぶ。 カタログに収録されているドイツ語テキストの購読を学生にも課す。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ドイツ近代国民国家概念の萌芽期から現代にいたる変遷を知り、理解することができる。 ・ドイツ以外の歴史上の国々、また現在存在する諸国家が近代国民国家、あるいは議会制民主主義概念に照らしてどう分類されるかを、みずから推定できるようになる。 中目標 ：Ab56-1；G36-4													
授業計画 第1回：導入：本講義の概要と使用するテキストについて説明する。 第2回：テキスト第一章導入部分の概要説明と輪読 第3回：第一章1節の概要説明と輪読 第4回：第一章2節の概要説明と輪読 第5回：第一章3節の概要説明と輪読 第6回：第一章4節の概要説明と輪読 第7回：第一章5節の概要説明と輪読 第8回：第一章の内容総括													
教科書 Deutscher Bundestag (Hrs.)：Wege Irrwege Umwege. Die Entwicklung der parlamentarischen Demokratie in Deutschland, Berlin 2002.													
参考文献 必要に応じて指示する。													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>30%</td> <td>テキストの内容から、自分の選んだ時代・国家が、議会制民主主義概念からみてどのような国家であるかを考察する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>70%</td> <td>テキストの講読分担を果たす。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	30%	テキストの内容から、自分の選んだ時代・国家が、議会制民主主義概念からみてどのような国家であるかを考察する。	平常点評価	70%	テキストの講読分担を果たす。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	30%	テキストの内容から、自分の選んだ時代・国家が、議会制民主主義概念からみてどのような国家であるかを考察する。											
平常点評価	70%	テキストの講読分担を果たす。											
そ の 他	%												
備考・関連URL													

授業科目名： 芸術学特論	担当教員名： 福島 勲												
授業の概要 本授業では、思想家たち（ジョルジュ・バタイユ等）の芸術論（美術、映画、文学等）を手がかりにして、人間と「芸術」の関係について考察する。具体的には配布されたテキスト（和文、欧文）の輪読をしながら、その内容について参加者とともにディスカッションを行う。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・芸術の役割について、人類学・哲学的な視野から考えることができる（C6-2）。 ・科学技術の進歩や経済的効率性とは別の観点から人間を考えることができる（F56-2）。 ・学際的に共有可能な言葉を用いて、人間や芸術を論じることができる（E56-2）。 													
授業計画 第1回：イントロダクション：「芸術」とは何か？ 第2回：芸術論1を読む（1） 第3回：芸術論2を読む（2） 第4回：芸術論3を読む（1） 第5回：芸術論4を読む（2） 第6回：芸術論5を読む（1） 第7回：芸術論6を読む（2） 第8回：まとめと到達度確認：「芸術」と人間													
教科書 適宜、配布する													
参考文献 適宜、指示する													
成績評価方法 <table> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>授業の到達目標の達成度による</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業内での積極的参加による</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	50%	授業の到達目標の達成度による	平常点評価	50%	授業内での積極的参加による	その他	%	
試験	%												
レポート	50%	授業の到達目標の達成度による											
平常点評価	50%	授業内での積極的参加による											
その他	%												
備考・関連URL 輪読するテキストの内容は、履修学生の興味に応じて柔軟に変更する。													

授業科目名： 歴史人類学特論	担当教員名： 里見 龍樹												
授業の概要 歴史人類学は、文化人類学に歴史学的な視点を取り入れた、比較的新しい研究分野・アプローチであり、伝統的な文化人類学が、研究対象としての「文化」や「社会」を不変で固定的なものとしてとらえがちであったことへの反省から提唱された。本講義では、歴史人類学成立の背景を踏まえた上で、参加者の関心に基づき、この分野の重要文献から和文および英文の論文を選定し講読する。また、歴史人類学以後の文化人類学における理論的展開についても取り上げる。文献の批判的検討と議論への積極的参加を通じ、現代の文化人類学を、自らの研究で活用できるアプローチとして習得してもらうことが本講義のねらいである。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・歴史人類学の研究史と近年の研究動向について説明することができる。(C5-1) ・学術的文献を批判的に読解することができる。(Ac6-3) ・文化人類学の研究蓄積を、自らの研究実践に批判的に取り入れ、活用することができる。(B56-4、C6-2) 													
授業計画 第1回：歴史人類学の成立と展開——研究史の概観 歴史人類学が比較的新しい研究分野として成立した学説史的な背景について講義する。 第2回：文献講読（1）——エスノヒストリー（日本語論文） 歴史人類学の主要なテーマである「エスノヒストリー」（人々の、ローカルな歴史体験や歴史認識）について、日本語論文の講読を通じて学ぶ。 第3回：文献講読（2）——エスノヒストリー（英語論文） 歴史人類学の主要なテーマである「エスノヒストリー」（人々の、ローカルな歴史体験や歴史認識）について、英語論文の講読を通じて学ぶ。 第4回：文献講読（3）——植民地主義と文化（日本語論文） 歴史人類学という分野が成立した主要な背景でもある、植民地主義と文化および人類学の問題について、日本語論文の講読を通じて学ぶ。 第5回：文献講読（4）——植民地主義と文化（英語論文） 歴史人類学という分野が成立した主要な背景でもある、植民地主義と文化および人類学の問題について、英語論文の講読を通じて学ぶ。 第6回：文献講読（5）——歴史人類学以後の展開（日本語論文） 歴史人類学の登場以後における文化人類学理論の展開について、日本語論文の講読を通じて学ぶ。 第7回：文献講読（6）——歴史人類学以後の展開（英語論文） 歴史人類学の登場以後における文化人類学理論の展開について、英語論文の講読を通じて学ぶ。 第8回：まとめ 全体のまとめを行い、歴史人類学のこれまでとこれからについて考える。予習としてこれまでの授業の総復習を求める。													
教科書 特になし。													
参考文献 授業時に紹介する。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>100%</td> <td>授業参加への積極性、および授業時に課す課題の達成度を総合して評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	%		平常点評価	100%	授業参加への積極性、および授業時に課す課題の達成度を総合して評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	%												
平常点評価	100%	授業参加への積極性、および授業時に課す課題の達成度を総合して評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 最終回に、授業全体に対する講評・フィードバックを行う。													

授業科目名： 建築計画学特論	担当教員名： 佐野 友紀												
授業の概要 建築、都市計画のために、人間の行動観察や建築の使われ方等のフィールド調査、文献調査、実験室実験の手法を学ぶ。また、実際の調査データをもとに、統計的分析を行い、現象を予測、評価することで、建築計画にフィードバックする手法を学ぶ。この際に、数理モデル、数学的・統計的分析手法を用いる。また、建築の安全性、利便性、持続可能性等についてのテーマについて、問題点の解明と解決策の提案を行った上で、論文形式のレポートとしてまとめる。													
授業の到達目標 ・フィールド調査、文献調査、実験室実験の手法を学び、建築計画にフィードバックする手法を習得することを目標とする。													
授業計画 第1回：ガイダンス（建築計画学とは？） 第2回：機器寸法計測（1）概要 第3回：機器寸法計測（2）講評 第4回：行動観察調査（1）概要 第5回：行動観察調査（2）調査 第6回：行動観察調査（3）講評 第7回：質問紙調査（1）概要 第8回：質問紙調査（2）調査													
教科書 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。													
参考文献 必要に応じて授業時に教科書を指示又は資料を配布する。													
成績評価方法 <table> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>平常時の発表の内容を評価する。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	50%	建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。	平常点評価	50%	平常時の発表の内容を評価する。	その他	%	
試験	%												
レポート	50%	建築、都市における自主実地調査を行うレポート、文献調査を行うレポートを出題し、その内容を評価する。											
平常点評価	50%	平常時の発表の内容を評価する。											
その他	%												
備考・関連URL													

授業科目名： 発達動機づけ特論	担当教員名： 外山 紀子
授業の概要 乳児期から児童期までの各時期において、環境（他者やモノ）による支えられながら、子どもが動機づけを持ち知識を獲得していく過程を解説する。	
授業の到達目標 ・発達の各時期に即した学びの特徴、動機づけを支える環境の役割を理解する。	
授業計画 第1回：研究紹介(1) 第2回：研究紹介(2) 第3回：研究紹介(3) 第4回：研究紹介(4) 第5回：研究紹介(5) 第6回：研究紹介(6) 第7回：受講者の研究発表 第8回：総括、フィードバック	
教科書 特に指定しない。	
参考文献 随時紹介する。	
成績評価方法 試 験 % レポ ー ト 50% 最終レポートを評価する。 平常点評価 50% コメントカードと、授業への参加度、意欲を評価する。 そ の 他 %	
備考・関連 URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">社会文化心理学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">古山 宣洋</p>												
授業の概要 心理学における思考と言語、相互行為、コミュニケーションなどの諸問題に対する社会文化的アプローチについて基本文献の輪講を行う。そのなかで、社会文化的アプローチの可能性と克服すべき課題について議論する。今年度は、ヤーン・ヴァルシナー著「新しい文化心理学の構築～心と社会の中の文化」(新曜社、2013)をテキストとし、議論する予定である。(ただし、開講時点での当該トピックスの動向によっては、文献を変更する可能性もある。)													
授業の到達目標 ①心理学における社会文化的アプローチがどのようなものであるかについて理解する (B56-4、C5-1、C6-1) ②心理学における社会文化的アプローチの可能性や克服すべき課題について議論できる (Ad56-2、Ad56-3、Ad56-4) (E56-2、G36-5)													
授業計画 第1回：オリエンテーション 本講義の趣旨の説明、ならびに輪講担当章の決定 第2回：文献講読(1) 第1章：文化へのアプローチ～文化心理学の記号論的基礎 第3回：文献講読(2) 第2章：社会とコミュニティ～社会的網目の相互依存性 第4回：文献講読(3) 第3章：対立を作り出す～対話的自己と、意味形成における二重性 第5回：文献講読(4) 第4章：最小のコミュニティとその組織～血縁集団、家族、結婚形態 第6回：文献講読(5) 第5章：文化の全体は移動のただなかにある～記号的宇宙の中の境界域の維持と公団 第7回：文献講読(6) 第6章：文化的プロセスとしての思考 第8回：文献講読(7) 第7章：行為における記号フィールド～情緒による内化/外化プロセスのガイダンスまとめのディスカッション													
教科書 ヤーン・ヴァルシナー(2013)「新しい文化心理学の構築～心と社会の中の文化」(サトウタツヤ監訳)、新曜社。													
参考文献 適宜紹介する。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td style="text-align: center;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td style="text-align: center;">100%</td> <td>評価は、文献輪講(発表とレジユメ)、ならびにディスカッションへの参加(発言)によって行う。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td style="text-align: center;">%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	%		平常点評価	100%	評価は、文献輪講(発表とレジユメ)、ならびにディスカッションへの参加(発言)によって行う。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	%												
平常点評価	100%	評価は、文献輪講(発表とレジユメ)、ならびにディスカッションへの参加(発言)によって行う。											
そ の 他	%												
備考・関連URL <ul style="list-style-type: none"> ・初回は、輪講の担当章を決めるので、単位を必要とする者は必ず出席すること。 ・ディスカッション形式の授業なので、フィードバックは授業中に行う。 													

授業科目名： 老化機構・加齢制御学特論	担当教員名： 千葉 卓哉、近藤 嘉高
授業の概要 個体は必ず老いていき、やがて死にいたる。これまで多くの研究者が老化のメカニズムに関する学説を提唱してきた。それらについて解説し、最先端の研究における成果とその応用の可能性について講義する。世間にあふれているアンチエイジング関連製品の真偽についても解説し、科学的根拠に基づく思考力の養成およびその能力を活用した問題解決力の形成を目指す。受講者各自に個別の課題を与え、その発表内容に対するディスカッション形式の講義もあわせて行う。本授業は、教室授業を基本とし、一部オンデマンド授業で実施します。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・老化・寿命に関する諸学説を理解する (B56-1, C6-1)。 ・科学的根拠に基づくアンチエイジング医学を理解する (B56-1, C6-1)。 ・関連分野の問題解決・研究遂行に必要な理論の基礎を理解する (B56-1, C6-1)。 	
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） 本講義の目的と概要について説明します。配布資料の復習を求めます。（教室授業） 第2回：研究内容の概説 研究内容の概説を行います。書籍の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（教室授業） 第3回：輪読（論文紹介）と討論（初級） 輪読（論文紹介）と討論を行います。書籍等の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（オンデマンド授業） 第4回：輪読（論文紹介）と討論（準中級） 輪読（論文紹介）と討論を行います。書籍等の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（教室授業） 第5回：輪読（論文紹介）と討論（中級） 輪読（論文紹介）と討論を行います。書籍等の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（オンデマンド授業） 第6回：輪読（論文紹介）と討論（準上級） 輪読（論文紹介）と討論を行います。書籍等の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（教室授業） 第7回：輪読（論文紹介）と討論（上級） 輪読（論文紹介）と討論を行います。書籍等の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（オンデマンド授業） 第8回：まとめと総合討論 まとめと総合討論を行います。書籍等の事前読了による予習、および配布資料の復習を求めます。（教室授業）	
教科書 なし。	
参考文献 老化・寿命のサイエンス 実験医学別冊 羊土社 日本抗加齢医学会雑誌 メディカルレビュー社	
成績評価方法 試験 20% 授業内容の理解度確認を行う。 レポート 20% 論理的な文章作成能力を評価する。 平常点評価 80% 授業参加への積極性を評価する。 その他 0%	
備考・関連URL Course N@vi のお知らせ機能などを通じてフィードバックを行う。	

授業科目名： 体温・体液生理学特論	担当教員名： 永島 計
授業の概要 解剖から生理機能にいたるまでの自律神経についての知識を広めるとともに、最近の体温調節に関わる研究を紹介していく。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・体温調節にかかわる自律神経についての理解 ・温熱的な快適性、温度感覚のしくみについて理解する ・体温調節について広く、浅くではあるが全体的に理解できるようにする 	
授業計画 第1回：温熱的快適性とはなにか？ 第2回：温熱的快適性の脳機構？ 第3回：行動性体温調節について、その1 第4回：行動性体温調節について、その2 第5回：温熱的快適性に関する研究方法について 第6回：動物の体温調節 第7回：人の多温調節 第8回：総括	
教科書 40℃超えの日本列島でヒトは生きていけるのかー体温の科学から学ぶ猛暑のサバイバル術 永島 計 DOJIN選書 出版社：化学同人 ISBN-10：4759816828 ISBN-13：978-4759816822	
参考文献	
成績評価方法 試 験 0% なし レポ ー ト 0% なし 平常点評価 100% 調べたことの発表 および講義中への参加を評価対象とします。 そ の 他 0% なし	
備考・関連 URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">食品生命科学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">原 太一</p>												
授業の概要 本講義では、受講者が持ち回りで生命科学や各自の興味のあるトピックや研究成果をまとめてプレゼンテーションを行う。その発表内容に対して、参加者全員で相互討論を行う。参加者同士のインタラクティブな関係性のもと、知識の習得だけでなく様々な視点からの議論により、サイエンスの醍醐味や幅広いスキルを学び、みんなで高め合う講義を実現することを目的としている。専門分野に誇示せずに幅広い分野からの参加を期待する。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・生命科学や関連分野の知識を身につける。 ・ディスカッション能力を身につける。 ・情報発信のスキルを身につける。 ・新しい研究テーマを創出するスキルを身につける。 (B56-1, C6-1)													
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） / 本講義の目的と概要について説明します。 第2回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。 第3回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。 第4回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。 第5回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。 第6回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。 第7回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。 第8回：発表と議論 生命科学および関連分野（もしくは参加者の専門分野）における話題提供と相互討論。													
教科書 細胞の分子生物学（Molecular Biology of THE CELL）。または、相談により設定する。													
参考文献 受講者との相談により設定する。													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>10%</td> <td>発表資料のまとめの提出と内容により判断します。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>90%</td> <td>講義への積極的な参加を評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	10%	発表資料のまとめの提出と内容により判断します。	平常点評価	90%	講義への積極的な参加を評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	10%	発表資料のまとめの提出と内容により判断します。											
平常点評価	90%	講義への積極的な参加を評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL													

授業科目名： 分子神経科学特論	担当教員名： 榊原 伸一												
授業の概要 神経系は生物の行動を効率的に行うために外界からの情報を伝達、処理するために発達したシステムであり、人間の生理現象や行動をコントロールする重要な器官である。しかしその形成される過程や発達後に維持されるメカニズムはまだわからないことが多いのが現状である。本講義では脳や脊髄の構築を概観し、さらにその発生過程を分子レベル、細胞レベル、組織レベルの各レベルから多面的に理解することを目指す。また各自の興味を持つ神経科学に関するトピックスについてプレゼンテーションを行うとともに、代表的ないくつかの研究論文（英語）を輪読することによって、教科書や講義では得られないより深い理解を目指す。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・神経系の構造と各部の働きを遺伝子発現、分子動態から理解できる。 ・神経系の形成過程を理解する。 ・神経回路の分子的基盤を理解する。 ・神経科学の最新の知見を理解できる。 													
授業計画 第1回：受講ガイダンス 第2回：神経発生に関する遺伝子群 第3回：胎児期の神経発生過程のメカニズム 第4回：生後、成体の神経発生過程のメカニズム 第5回：神経発生過程のメカニズム論文のプレゼンテーション 第6回：神経発生過程のメカニズムについての論文の討論 1回目 第7回：神経発生過程のメカニズムについての論文の討論 2回目 第8回：哺乳類神経発生関連分子についての総合討論													
教科書 Principles of Neural Science, 5th ed. Kandel ER, Schwartz JH, Jessell TM 著 McGraw-Hill, New York													
参考文献													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>内容の理解度により判定する</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>出席、プレゼンテーション、発言の積極性</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	50%	内容の理解度により判定する	平常点評価	50%	出席、プレゼンテーション、発言の積極性	その他	%	
試験	%												
レポート	50%	内容の理解度により判定する											
平常点評価	50%	出席、プレゼンテーション、発言の積極性											
その他	%												
備考・関連 URL Course N@vi のお知らせ機能などを通じてフィードバックを行う。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">認知神経科学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">大須 理英子</p>												
授業の概要 認知神経科学の研究動向を、工学・医学などの周辺分野との関わり、そして、社会、産業との関わりの中で解説する。行動実験、脳機能イメージング、計算機シミュレーションなどを組み合わせた計算神経科学、医療応用としてのニューロリハビリテーションやブレインマシンインターフェース、ニューロフィードバック、産業応用としてのニューロマーケティングなどを順次紹介する。													
授業の到達目標 計算神経科学の考え方を理解する。 神経科学の応用例についての知識を得る。 神経倫理で議論されている問題を理解する。													
授業計画 第1回：ガイダンス 第2回：計算神経科学と脳機能イメージング 第3回：脳の可塑性と学習 第4回：ブレイン・マシン・インターフェース 第5回：ニューロリハビリテーション 第6回：ニューロフィードバックと神経倫理 第7回：ニューロマーケティング 第8回：まとめと到達度の確認													
教科書													
参考文献													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>80%</td> <td>授業の最後にレポートの提出を課します。 授業の理解度を評価します。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>20%</td> <td>毎回の授業でリアクションペーパーの提出を求めます。 授業への参加度を評価します。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	80%	授業の最後にレポートの提出を課します。 授業の理解度を評価します。	平常点評価	20%	毎回の授業でリアクションペーパーの提出を求めます。 授業への参加度を評価します。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	80%	授業の最後にレポートの提出を課します。 授業の理解度を評価します。											
平常点評価	20%	毎回の授業でリアクションペーパーの提出を求めます。 授業への参加度を評価します。											
そ の 他	%												
備考・関連URL 外部講師などの関係で、授業のテーマおよび順序が変更になる場合があります。 毎回の授業でリアクションペーパーの提出を求め、次の授業で質問などに対するフィードバックを行います。													

授業科目名： <p style="text-align: center;">健康管理医学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">河手 典彦</p>
授業の概要 <p>既に超高齢社会となったわが国では、全ての人間生活の基盤である健康管理の意義は年々増加している。この健康管理医学特論では、はじめに実践の健康管理の一手段である「健診」、「検診」の実態について幅広く習得する。基本的な各種検査方法やその結果の意味も正しく理解する。次いで生活習慣病と癌の中から代表的疾患を選択し、その臨床医学の基本と医療の実際について、現在の医療の情勢に基づきながら詳しく解説する。医療は正に日進月歩である。これらの講義内容の理解に基づいて、自身の健康維持・向上に対する見直しのみならず、わが国の健康管理医療の現状をも正確に把握し、適切な健康管理医学とは何かについて、その課題の検討を交えながら、健康と医療への理解を進めていく。</p>	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・健康生活の重要性を理解し臨床医学の視点から有効な健康管理の方策とその意義について説明できる。(B56-4、C5-1) ・疾病の一次予防、二次予防及び三次予防に関してその医療の実際を習得し、解説することできる。(B56-4、C5-1) ・代表的疾患についてその臨床医学・医療の実状を理解し、専門性に基づいた説明を行うことができる。(B56-4、C5-1) ・健康生活獲得のための健康管理医療の正確な情報取得及びその有効活用について実践できる。(D56-2、G36-4) 	
授業計画 <p>第1回：オリエンテーション、健康管理とは何か 本講義で取り上げる各種主題、健康管理とは何か、健康診断、健診と検診のちがい、生活習慣病の概念、疾病の予防(1次,2次,3次)、特定健康診査/特定保健指導、生体検査の概要(血圧,心電図,肺機能,X線撮影,超音波検査等)、主な検体検査(血液・生化学,腫瘍マーカー,尿検査等)</p> <p>第2回：高血圧症とその医療 高血圧症の実状,成因,検査法,合併症,危険因子としての高血圧症,予防と対策(関連因子別),高血圧症の薬物治療,白衣高血圧, morning surge.</p> <p>第3回：心臓血管疾患とその医療 心血管疾患の実状,冠状動脈の基礎知識,心臓の弁の基礎知識,心血管病の危険因子,プラークと血栓形成,虚血性心疾患:狭心症,心筋梗塞の症状,検査と診断,治療(薬物治療,カテーテル治療,ステント治療,外科治療),リハビリテーション,メタボリック症候群,メタボリックドミノ,虚血性心疾患の予防と対策.</p> <p>第4回：脳卒中(脳血管障害)とその医療 脳卒中とは,疫学,脳卒中の危険因子,脳の血管,脳卒中の病型分類,脳卒中:脳出血,脳梗塞,クモ膜下出血の症状,検査と診断,各種の治療法,脳卒中の予防,脳ドック,脳卒中の予防と対策.</p> <p>第5回：糖尿病とその医療 食事摂取と糖の動態,糖尿病とは,病型分類(1型,2型),糖尿病の診断,HbA1c値測定の意義,糖尿病の症状,糖尿病の合併症(3大合併症),治療目標,糖尿病の治療:食事療法,運動療法,薬物療法(各種の経口糖尿病薬,インスリン,インクレチン関連薬,SLGT-2阻害薬),糖尿病の予防と対策.</p> <p>第6回：脂質異常症,高尿酸血症とその医療 脂質異常症とは,脂質異常症の誘発因子,分類,脂質異常症と動脈硬化,臨床所見,改善と予防,治療(食事療法,運動療法,薬物療法) 高尿酸血症とは,尿酸の体内動態,分類と発症機序,痛風発作とその治療,高尿酸血症の予防と治療(食品の知識,薬物療法)</p> <p>第7回：非癌性呼吸器疾患(肺結核,COPD)とその医療 肺結核とは,肺結核の動向,肺結核と感染症法,肺結核の感染経路,抗酸菌,再興感染症,診断と検査法,治療法とその副作用,肺結核の予防 慢性閉塞性肺疾患(COPD)とは,COPDの疫学,病因・病態,症状と検査所見,診断,治療(薬物療法,</p>	

外科療法, リハビリテーション), 予後, COPD の予防と対策.

第8回: 肺癌とその医療

肺癌の疫学, 発生部位と組織型, 病型, 病理組織型分類, 肺癌の症状, 喫煙指数, 早期肺癌とは, 各種診断法, 腫瘍マーカー, 病期とは, 肺癌の治療法 (外科療法, 化学療法, 放射線療法など), 肺癌の予防 (1次予防, 2次予防, 3次予防), 肺癌の予防と対策.

第9回: 胃癌とその医療

胃癌の疫学, 胃癌の危険因子, ヘイコバクター・ピロリ, 好発部位, 自覚症状, 胃癌の組織型, 早期胃癌の定義, 早期胃癌と進行胃癌の分類, 胃癌の診断 (内視鏡検査, X線造影検査, 超音波検査等), 胃癌の治療 (手術療法: 開腹/腹腔鏡, 内視鏡下 EMR/ESD, 化学療法等), ダンピング症候群, 予後, 胃癌検診 (ABC 検診も含む), 胃癌の予防と対策.

第10回: 大腸癌とその医療

大腸癌の疫学, 大腸の構造, 危険因子, 大腸癌の1次予防, 発癌課程 (adenoma-carcinoma sequence, de novo cancer), 病理分類, 肉眼分類, 大腸癌の好発部位, 症状, 診断 (便潜血反応, 内視鏡, 注腸造影), 病期, 治療 (外科療法, 化学療法等), 大腸癌検診, 大腸癌の予防と対策

第11回: 肝臓癌とその医療

<急性ウイルス性肝炎 (A型, B型, C型, D型, E型), 慢性肝炎, 肝硬変>. 肝臓癌の疫学・病態, 肝臓癌の臨床症状, 肝臓癌の診察所見, 肝臓癌の検査とその所見, 肝臓癌の診断 (超音波ガイド下/腹腔鏡下生検), 肝臓癌の治療 (PEIT, TAE, TACE, 外科療法, 化学療法), 肝臓癌の予防と対策.

第12回: 乳癌とその医療

乳癌の疫学, 乳房の構造, 危険因子と1次予防, 乳癌の診断 (マンモグラフィー, 超音波検査, 細胞診断, 組織診断), 乳癌の症状と主な組織型の臨床的特徴, 好発部位, 鑑別診断, 乳癌の治療 (外科療法: その変遷, 乳房温存術, 乳房再建術, センチネルリンパ節, 化学療法, 内分泌療法, 放射線療法), 乳癌の予防と対策.

第13回: 子宮癌, 前立腺癌

子宮癌の疫学, 子宮頸癌: 危険因子, 進展と病期, 症状, 検査法, 診断, 治療 (手術療法, 放射線療法, 化学療法, PDT 療法), 子宮体癌: 危険因子, 進展と病期, 症状, 検査法, 診断, 治療 (手術療法, 放射線療法, 化学療法, 内分泌療法), 子宮癌の予防と対策. 前立腺癌の疫学: 前立腺癌の危険因子, 症状, 診断方法, PSA, 治療 (手術, 内分泌療法), 前立腺癌の予防と対策.

第14回: 白血病, 悪性リンパ腫

白血病の疫学, クローンとは. 急性骨髄性白血病, 急性前骨髄球性白血病, 急性リンパ性白血病, 慢性骨髄性白血病, 慢性リンパ性白血病, 成人T細胞
白血病の臨床医学的特徴と診断・治療. 悪性リンパ腫の疫学, 分類, 症状, 検査と診断, 治療の基本方針, R-CHOP 療法, 白血病・悪性リンパ腫の予防と対策.

第15回: 到達度の確認

到達度の確認と解説, 全体に対する講評 (フィードバック) .

教科書

使用しない。

参考文献

適宜、紹介する。

成績評価方法

試験 70% 第15回に到達度の確認とその解説を行い、講義内容の理解度を評価する。

レポート %

平常点評価 30% 出席、ならびに質疑応答などへの参加状況を評価し、到達度の確認成績決定の際に勘案する。

その他 %

備考・関連 URL

短期間の講義ではあるが、少しでも多くの臨床医学、臨床医療の現状に関する知識を正確に習得して貰いたい。最終授業で全体に対するフィードバックを行う。

授業科目名： 緩和医療学・臨床死生学特論	担当教員名： 小野 充一												
授業の概要 緩和医療と臨床死生学の現場で直面する以下のテーマについて、導入講義を行った後に各学生が以下のテーマのうちの何れかを選択して、グループワークを行う。 テーマは、①緩和医療が必要とされる理由と適応条件、②臨床死生学が必要とされる理由と条件 具体的な検討の内容は、自殺と安楽死・尊厳死、死刑制度、出世以前診断と人工妊娠中絶、医療的無益の判断とするが、おおむね5～6名でグループを形成して、各員が事前に準備してきた具体的な検討内容に沿った論文についてグループで共有して検討する作業を行い、グループでテーマについて発表原稿をまとめ最後の総括的な討論を行うことで、緩和医療学と臨床死生学に関する知識や概念を大学院レベルで能動的に習得することを目標としている。													
授業の到達目標 A) 緩和医療学と臨床死生学全般に関する知識を得る。 B) 緩和医療学と臨床死生学を支える中心的な概念を理解する。 C) 緩和医療学と臨床死生学で用いる調査や研究手法を理解する。													
授業計画 第1回：講義①緩和医療が必要とされる理由と適応条件、②臨床死生学が必要とされる理由と条件 第2回：グループ発表テーマの準備・先行研究論文の収集と検討 第3回：グループ発表・討論（つらさを和らげるために必要な条件） 第4回：グループ発表テーマの準備・先行研究論文の収集と検討 第5回：グループ発表・討論（悪い情報を伝えるために必要な条件） 第6回：グループ発表テーマの準備・先行研究論文の収集と検討 第7回：グループ発表・討論（治療を手控えるために必要な条件） 第8回：総合討論；緩和医療と臨床死生学に求められる条件													
教科書 ・「最新緩和医療学」恒藤暁著、最新医学社 ・「テキスト臨床死生学」日本臨床死生学会編、勁草書房													
参考文献													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>％</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>80%</td> <td>講義終了時レポート</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>20%</td> <td>出席状況、グループワーク、個人発表</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>％</td> <td></td> </tr> </table>		試験	％		レポート	80%	講義終了時レポート	平常点評価	20%	出席状況、グループワーク、個人発表	その他	％	
試験	％												
レポート	80%	講義終了時レポート											
平常点評価	20%	出席状況、グループワーク、個人発表											
その他	％												
備考・関連URL													

授業科目名： 医療情報学特論	担当教員名： 前田 幸宏
授業の概要 医療の質の確保と安全性の向上は、すべての人に関わる重要事項であり、医療分野の情報化は国の重点施策のひとつである。最近の病院の状況紹介、ネット上での医療に関わる情報、医療の質改善、医療事故防止などについて概説した後、ネット上の医療データを利用した分析を各自で行う。また、医療ビッグデータなど、最近の医療情報に関する話題を提供する。	
授業の到達目標 (1) ネット上での医療情報の概要について説明できる (C5-1) (2) 医療の質評価の概要について説明できる (C5-1) (3) 診療情報分析の概要について説明できる (Ad56-3)	
授業計画 第1回：病院業務の概要 最近の病院設備等の状況、病院内の状況について理解する。情報共有と患者情報保護など、医療情報に関係する事項の概要について理解する。 第2回：病院の情報システム化の概要 病院の電子カルテシステムの概要、地域医療ネットワーク、医療のICT化に関わる国の施策の方向性などについて理解する。 第3回：ネット上の医療情報の概要 がんに関する信頼できる情報源、救急受診ガイドなど、知っていると役に立つ情報を中心に、ネット上の医療情報について理解する。 第4回：医療の質評価の概要 医療の質改善の手法のひとつとして多くの病院で実施されている「病院機能評価」の概要、医療安全に関する考え方の概要などについて理解する。 第5回：診療情報分析の概要 医療の質を測るための臨床評価指標（クリニカル・インディケータ）の概要、診療データ分析の概要などについて理解する。 第6回：日本における医療ビッグデータの概要 医療の情報活用に関わる国の施策の概要、日本における医療ビッグデータの現状について理解する。 第7回：診療情報分析の実施 ネット上で公開されている診療実績データの使用方法について説明した後、そのデータを用い、各自の関心に応じて研究テーマを立案し分析を行う。各自のパソコンを使用する。 第8回：診療情報分析の実施（発表および総括） 前回到引き続き、各自のパソコンを使用して分析を行い、データに基づく分析の重要性を理解する。授業全体を通じた質疑応答および補足説明を行う。	
教科書 なし	
参考文献 なし	
成績評価方法 試験 0% 実施しない。 レポート 20% 授業最終回の中で行う診療情報分析の内容から評価する。 平常点評価 80% 各授業の出席状況および授業内での質疑の積極性などから総合的に評価する。（学会参加等のための欠席には配慮する） その他 %	
備考・関連URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">医療人材管理特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">岩満 裕子</p>												
授業の概要 環境の変化および政策による医療界の現状を理解すると共に、必要とされるチーム医療の在り方も含め人材活用の面からこれからの必要とされる人材について検討する。 人を動かすための人間理解を含めて実践に活かせる知識を入れながら進めていきます。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・医療界における人員配置基準・雇用形態・労働環境を理解し、医療政策を見据えた今後の専門職種の人材活用方法が創造できる。 ・医療人の倫理的問題について検討し、倫理的視点を持つことができる。 ・地域ネットワークをも包括したチーム医療の必要性を理解し、チーム・マネジメント手法を学ぶ。 ・専門職種間の conflict management および会議等でのファシリテーション技法を学ぶ。 ・組織論の変遷、リーダーシップ論を学び、チーム医療のあり方を管理的視点から考察し、リーダーに必要なとされる competency を考案できる。 													
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） / 本講義の目的と概要について説明します。 日本の医療の第三者評価について説明します。 第2回：医療界における人員配置基準・雇用形態・外国人労働者も網羅した労働環境について説明します。 医療政策と診療報酬について説明を加え、これからの医療界を医療をうける国民の立場から考える。 第3回：医療の倫理的側面の課題を検討します。 サービスとは何かを学び、医療におけるサービスの視点から現状の課題とこれからの医療サービスについて検討する。 第4回：組織論の変遷とリーダーシップ論について学び、第3回のサービスの視点も網羅した、これからのリーダーに必要な competence を検討する。 第5回：医療界も専門特化してきている現状と専門職種間の conflict について説明し、 conflict management について学ぶ。 第6回：地域を視野に入れたチーム医療の現状と課題について説明し、チーム・マネジメント能力、ファシリテーション技法の必要性について学ぶ 第7回：求められるチーム医療について、これまでの学びを含め考察する 第8回：これからの医療界に必要な人材とはどんな能力を持った人かを全講義を総括し考える。													
教科書 なし													
参考文献 P・ハーシー/K・H・ブランチャード/D・E・ジョンソン著、山本成二/山本あづさ訳：行動科学の展開、生産性出版 クリストファー・ラブロック/ローレン・ライト著、小宮路雅博監訳、サービス・マーケティング原理、白桃書房 ダグラス・マクレガー著、高橋達男訳：新版企業的人間的側面、産業能率大学出版部													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>医療界で必要となる人材についての理解度をレポートにて評価します。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>講義中の意見等にて評価します。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	医療界で必要となる人材についての理解度をレポートにて評価します。	平常点評価	50%	講義中の意見等にて評価します。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	医療界で必要となる人材についての理解度をレポートにて評価します。											
平常点評価	50%	講義中の意見等にて評価します。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL													

授業科目名： リハビリテーション工学特論	担当教員名： 村岡 慶裕
授業の概要 リハビリテーション工学は、心身に不自由を抱えている方のQOLの向上のために、本人とその家族、さらには支援者を工学的に支援する学問である。メガネや杖などの身体の機能を補助する道具から、身体機能の改善を目指すための治療機器や評価機器などに多岐にわたる。 本講義においては、障害関連の知識を習得しながら、様々な障害を生物学的側面も含めて学び、事例を通して、様々な障害に対し、治療的、支援機器的、評価法的、社会的観点から工学的どのようにアプローチが成しうるかを検討していく。最後の第8回の授業では、各自、本講義に関わる事例を一つ挙げ、その当事者が、その人らしい暮らしに導くための支援手法を立案して発表する。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ 障害に関連する知識を習得する。 ・ 心身に障害を持つ方の生活における困難を理解する。 ・ 心身に障害を持つ方のニーズを理解する。 ・ 種々の症例に対し、工学的支援手法を立案できるようになる。 	
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要）／本講義の目的と概要について説明します。 第2回：肢体不自由の理解 肢体不自由とその支援についての事例の資料について、より良い支援方法などの検討について討論を行います。 第3回：視覚障害の理解 視覚障害とその支援についての事例の資料について、より良い支援方法などの検討について討論を行います。 第4回：言語障害の理解 言語障害とその支援についての事例の資料について、より良い支援方法などの検討について討論を行います。 第5回：発達障害の理解 発達障害とその支援についての事例の資料について、より良い支援方法などの検討について討論を行います。 第6回：重複障害の理解 重複障害とその支援についての事例の資料について、より良い支援方法などの検討について討論を行います。 第7回：コンピュータ・アクセシビリティ コンピュータ・アクセシビリティ等について事例をあげて概説します。 第8回：まとめ・到達度の確認（発表） 各自、本講義に関わる事例を一つ挙げ、その当事者が、その人らしい暮らしに導くための支援手法を立案して発表する。最後に本講義について総括します。	
教科書 無し	
参考文献 適宜配布	
成績評価方法 試験 25% 第8回の発表およびディスカッションを到達度の確認とします。 レポート 25% 第8回の発表のレジメをレポートとします。 平常点評価 50% 各回の出席状況、討論への積極性について評価し、平常点とします。 その他 %	
備考・関連URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">子ども家庭福祉特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">上鹿渡 和宏</p>												
授業の概要 少子化の中、児童虐待対応件数や未成年の自殺者数は増加している。中でも様々な理由により家族と暮らせず社会的養護下におかれた子どもの窮状への理解・対応は不十分な状況が続いている。近年児童福祉法に子どもの権利について明記されたこともふまえて、子どもが家庭における「あたりまえ」の生活環境や人間関係の中で個別のニーズを満たすことの重要性やその実現方法について、福祉やメンタルヘルスの観点から複眼的に理解し検討する。													
授業の到達目標 (1) 現代社会を生きる子どもと家庭の置かれた困難を理解する。(C6-2) (2) 子どもが家庭で育ち地域で生きることの重要性とその支援の方法を理解する。(E56-1) (3) 子ども家庭福祉の実践に必要な子どもの権利やメンタルヘルスの視点を得る。(C6-1)													
授業計画 第1回：オリエンテーション：本講義の目的と概要について説明し、日本における社会的養護の現状について視聴覚教材も活用して把握する。 第2回：日本の社会的養護の現状：引きつづき視聴覚教材も活用して現状の課題について把握する。 第3回：子どもの権利条約：制定までの経緯と28年改正児童福祉法に示された内容を理解し今後の子ども家庭福祉への影響について議論する。 第4回：子どもの家庭養育優先原則の根拠となる実証研究：国連ガイドライン等が根拠とする研究成果（発達への影響）について理解する。 第5回：子どもの家庭養育移行への取り組み例：英国・ルーモスのDI(Deinstitutionalisation)の取り組みについて理解し議論する。 第6回：今後必要とされる社会的養育：「28年改正児童福祉法」から「新しい社会的養育ビジョン」「都道府県計画策定」をもとに議論する。 第7回：新しい社会的養育実現に向けた動き（1）：乳児院の多機能化・機能転換の実際について理解する。 第8回：新しい社会的養育実現に向けた動き（2）：フォスタリング機関とフォスタリングチェンジ・プログラムについて理解する。													
教科書 指定しない													
参考文献 随時、関連図書や論文を紹介する。													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>80%</td> <td>ミニレポートや期末レポートにより、理解度と考察の独自性を評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>20%</td> <td>授業内での発言、ディスカッションへの積極的参加度等を総合して評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	80%	ミニレポートや期末レポートにより、理解度と考察の独自性を評価する。	平常点評価	20%	授業内での発言、ディスカッションへの積極的参加度等を総合して評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	80%	ミニレポートや期末レポートにより、理解度と考察の独自性を評価する。											
平常点評価	20%	授業内での発言、ディスカッションへの積極的参加度等を総合して評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連URL													

授業科目名： 社会保障政策特論	担当教員名： 植村 尚史
授業の概要 福祉国家政策の変遷と最近の日本の社会保障政策の動きについて、講義（オンデマンドの場合もありうる）とディスカッションを組み合わせながら、政策決定のプロセスと国際的視点を学んでいく。	
授業の到達目標 社会保障政策や福祉国家政策について、政治学的、経済学的な視点を獲得する。 国際的な観点も含めて、社会保障政策の評価を行うことができる。	
授業計画 第1回：オリエンテーション（本講義の目的と概要） 本講義の目的と概要について説明します。 第2回：福祉国家の成立 福祉国家がどのような背景から成立したか、福祉国家どのような政策目的を持っているのかについて学びます。 第3回：福祉国家の危機 1980年代の福祉国家の危機といわれた時代について、その背景と各国の対応について学びます。 第4回：福祉国家の変容 1980年代の改革を通じて、福祉国家はどのように変化してきたのかについて学びます。 第5回：新自由主義と福祉国家 サッチャー改革以降の新自由主義の台頭と金融危機の関係、その中で福祉国家政策はどのような役割を果たしてきたのかについて学びます。 第6回：近年の動向 金融危機以降のヨーロッパの福祉国家の動向について学びます 第7回：日本の社会保障政策① 主に、1980年代の「増税なき財政再建」政策の意味とそこにおける社会保障の位置づけについて学びます。 第8回：日本の社会保障政策② 小泉構造改革とその後の社会保障政策の動向について学びます。	
教科書 講義の中で提示	
参考文献 講義の中で提示	
成績評価方法 試験 % レポート 50% 毎回の授業に関して、次回に報告するレポートを作成してもらい、それによって評価します。 平常点評価 50% 授業でのディスカッションへの参加状況によって評価します。 その他 %	
備考・関連URL レポートの内容に関するフィードバックは、授業内で行う。	

授業科目名： <p style="text-align: center;">地域福祉特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">古山 周太郎</p>												
授業の概要 地域福祉学は、人間の生活が営まれる地域コミュニティへの理解、地域の住民や様々なグループの組織化やコミュニティワークの方法論の構築、さらには地域福祉に関する計画技術の向上を目指す学問領域である。本講義では、関連文献の読解や、各種統計データの分析、ロールプレイなどの演習により、地域福祉に関する重要な概念の理解や手法の修得を図ると共に、実際の事例を用いて、具体的場面での各手法の応用の仕方を学んでいく。													
授業の到達目標 1) 地域福祉に関する理論について多角的な視点から理解することができる。(C5-1) 2) コミュニティワークを基盤とする地域福祉に関する一連の技術を説明できる。(B56-3) 3) 地域福祉に関する事例の課題解決に向けて、組織化や実践活動を含む具体的計画を提案することができる。(D56-2)													
授業計画 第1回：オリエンテーション 本講義の目的と進め方について説明します。 第2回：福祉コミュニティに関する諸理論とコミュニティ空間 岡村重夫の福祉コミュニティの内容を学び、コミュニティ計画論を説明します。 第3回：コミュニティワークの理論と住民の組織化 コミュニティワークや住民の組織化についての基本的文献や論文を取り上げ、対象や目的、手法について学びます。 第4回：コミュニティワークの演習 事例をもとにコミュニティワークの実践的な応用について演習を行います。 第5回：地域のアセスメント 地域福祉を展開するためのアセスメントの方法や事例について学びます。 第6回：地域福祉と防災・減災災害時要援護者対策や仮設住宅におけるコミュニティ支援の内容について学びます。 第7回：地域理解と施設コンフリクト 障害者施設への反対運動や受容プロセスを通じてインクルーシブな社会とは何かについて学びます。 第8回：今後の地域福祉の展開に向けて 地域包括ケアの深化・推進とコンパクトシティ形成に向けた現状と課題について理解します。													
教科書 特になし													
参考文献 講義内で適宜指示する。													
成績評価方法 <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>講義の内容の理解の程度と、論述の内容に基づき評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>発表内容やディスカッションへの積極的な態度を評価する。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポート	50%	講義の内容の理解の程度と、論述の内容に基づき評価する。	平常点評価	50%	発表内容やディスカッションへの積極的な態度を評価する。	その他	%	
試 験	%												
レポート	50%	講義の内容の理解の程度と、論述の内容に基づき評価する。											
平常点評価	50%	発表内容やディスカッションへの積極的な態度を評価する。											
その他	%												
備考・関連 URL レポートへのフィードバックは最終回に行う。													

授業科目名： ソーシャルワーク特論	担当教員名： 岩崎 香												
授業の概要 主要なソーシャルワーク理論に関する考察を深め、実践に関する実証研究のあり方を学ぶことを目的とする。 まず、ソーシャルワーク理論の歴史を概観し、主要なソーシャルワーク理論について学ぶ。その上で近年のソーシャルワーク実践に関する実証研究の方法論の動向を理解し、理論と実践のあり方、現状について考察する。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・ソーシャルワーク理論と実践、研究をめぐる歴史的な状況を理解する。(C5-1) ・社会福祉領域の実践と研究の循環の社会的意義を学び、実証研究の必要性及び社会的貢献に対する理解を深める。(F56-1) 													
授業計画 第1回：オリエンテーション／本講義の目的と概要に関する説明を行う。 第2回：ソーシャルワークの実践理論入門／ソーシャルワークに関する理論と実践、研究方法に関する歴史的な状況を理解する。 第3回：代表的なソーシャルワークの実践理論／古典的な理論からエコロジカル・アプローチまでについて理解する。 第4回：近年のソーシャルワークの実践理論／エコロジカル・アプローチ以降の近年のソーシャルワーク理論（エンパワーメント・アプローチ、ナラティブ・アプローチ他）を学ぶ。 第5回：高齢者領域のソーシャルワーク／近年注目されている理論や研究方法を活用した論文を取り上げ、研究方法、倫理、実践への貢献等の視点からディスカッションを行う。 第6回：障害者領域のソーシャルワーク／近年注目されている理論や研究方法を活用した論文を取り上げ、研究方法、倫理、実践への貢献等の視点からディスカッションを行う。 第7回：児童領域や貧困に関するソーシャルワーク／近年注目されている理論や研究方法を活用した論文を取り上げ、研究方法、倫理、実践への貢献等の視点からディスカッションを行う。 第8回：今後のソーシャルワーク実践と研究について／社会福祉の研究と実践が循環することの意義に関してディスカッションを通して理解を深める。													
教科書 なし													
参考文献 授業の中で提示													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうかを重点を置く。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうかを重点を置く。	平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。	その他	%	
試験	%												
レポート	50%	レポートで評価。授業内容を理解し、自分なりの視点で課題に取り組んでいるかどうか、論述の構成がしっかりしているかどうかを重点を置く。											
平常点評価	50%	授業における発言、プレゼンテーション、リアクションペーパー等の内容でその理解度を評価する。											
その他	%												
備考・関連URL レポートへのフィードバックは最終授業で行う。													

授業科目名： 子どもの健康福祉学特論	担当教員名： 前橋 明												
授業の概要 本講では、子どもを対象にした健康福祉学を取りあげる。将来、社会の担い手となる子どもたちが、心身ともに健康で、かつ、社会の仲間を人として尊び、相互に思いやりの心で援助し合って生き生きとした暮らしを実現していくという「健康福祉」の心を育てていくために、園や学校ならびに家庭や地域における健康福祉教育のあり方やその具体的実践について情報収集し、子どもの健康福祉に関する理解を深める。そして、近年の社会において必要とされる「子どもの健康福祉」のあり方を模索する。													
授業の到達目標 (1) 子どもに対する健康福祉教育の実践を調べ、子どもの健康福祉に関する理解を深めるとともに、その取り組みの概要を発表できる。 (2) 講義での学習や与えられた課題の遂行によって、子どもに対する健康福祉教育のあり方や、近年、必要とされる子どもの健全育成のための方策を検討し、提案できるようになる。													
授業計画 第1回：授業の概要と進め方、子どもの健康福祉学の目的と内容、福祉の心とは 第2回：近年の子どもたちが抱える・抱えさせられている健康福祉上の問題とその対策 第3回：家庭や園、学校における健康福祉教育の現状と課題 第4回：社会（行政、保健センター）における健康福祉教育の現状と課題 第5回：福祉体験Ⅰ（車椅子援助体験） 第6回：福祉体験Ⅱ（視覚障がい者の方への手引き体験） 第7回：福祉体験Ⅲ（福祉レクリエーション） 第8回：福祉体験シンポジウム、子ども支援・保護者支援・保育者支援・地域支援を考える 第9回：レポート課題報告と討論・評価<1>「幼児対象」 第10回：レポート課題報告と討論・評価<2>「小学生対象」 第11回：レポート課題報告と討論・評価<3>「中学生対象」 第12回：レポート課題報告と討論・評価<4>「障がい児対象」 第13回：レポート課題報告と討論・評価<5>「子どもと関わる保育者・教育者対象」 第14回：レポート課題報告と討論・評価<6>「子育て中の保護者対象・その他」 第15回：課題レポートの最終提出と解説													
教科書 前橋 明：3歳からの今どき「外あそび」育児、主婦の友社、2016													
参考文献 前橋 明：子どもの健康福祉指導ガイド、大学教育出版、2017 前橋 明：子どもの健康福祉指導ガイド2、大学教育出版、2017													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>％</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>50%</td> <td>与えられた課題を、講義内容を絡めて考察・論述しているかどうかを評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>発表やディスカッションへの参加を評価し、全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>％</td> <td></td> </tr> </table>		試験	％		レポート	50%	与えられた課題を、講義内容を絡めて考察・論述しているかどうかを評価する。	平常点評価	50%	発表やディスカッションへの参加を評価し、全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。	その他	％	
試験	％												
レポート	50%	与えられた課題を、講義内容を絡めて考察・論述しているかどうかを評価する。											
平常点評価	50%	発表やディスカッションへの参加を評価し、全授業回数の3分の2以上の出席を履修の条件とする。											
その他	％												
備考・関連URL なお、本講義内容は、DP科目 育児保育2-2、2-3、6-2、6-3、6-4、7-2、7-3、7-4、7-5に該当する。 最初の授業は、教室に集合し、授業を行います。また、最終授業で、全体に対するフィードバックを行います。													

授業科目名： 老年社会福祉学特論	担当教員名： 加瀬 裕子
授業の概要 老年学は、個人の身体的変化から社会的現象まで、老化に伴う諸問題について研究する学問である。老化に伴う問題を、社会福祉学の視点から研究する老年社会福祉学は、単に老人福祉を対象とするものではない。高齢化や少子化によって生じる個人の生活への影響や社会構造への影響について、国際的動向を踏まえて概説する。	
授業の到達目標 (1) 高齢者問題について、学際的視野からアプローチする重要性について認識することができるようになる。(E56-1) (2) 高齢化先進諸国が行っている政策の共通点について、的確に述べる事が出来るようになる。(C6-1)	
授業計画 第1回 高齢者の身体的、心理的、社会的変化 第2回 高齢者の健康づくりとサクセスフル・エイジング 第3回 老人福祉法と老人福祉サービス 第4回 高齢者の在宅ケアチームアプローチとケアマネジメント 第5回 高齢者の地域ネットワークと地域包括支援センターの役割 第6回 アメリカの高齢者介護と住宅 第7回 認知症ケア 1 第8回 認知症ケア 2	
教科書 授業中に資料を配布する。	
参考文献	
成績評価方法 試験 50% 学会論文レベルの論理的レポートであること。 レポート 50% ディスカッションに参加し、データに基づく意見を述べること。 平常点評価 50% ディスカッションに参加し、データに基づく意見を述べること。 その他 50%	
備考・関連URL	

授業科目名： パフォーマンス認知科学特論	担当教員名： 三浦 哲都
授業の概要 本講義では、まず実験心理学的視点による感性研究について、その背景にある基礎的な考え方や研究手法を概説する。その後、音楽演奏やダンス、演劇などのパフォーマンスアートに関する感性研究について、身体性との関わりに焦点を当てて講義をする。その際に感性印象を研究することは、感じる人間の側と、感じさせる対象の側、そしてその双方の相互作用についての研究であるという視点から、様々な研究を考察する。授業期間の後半には、グループ毎に関連文献を読み発表をしてもらう。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・実験心理学的視点による感性研究の基礎知識を獲得する。(B56-1) ・感性印象研究における主客の関係性について理解する。(B56-2) ・自身の研究テーマ（もしくは専門のパフォーマンスアート）に対して、どのような視点や研究手法が応用可能かを論理的に説明できるようになる。(B56-3, B56-4, C6-1, C6-2) 	
授業計画 第1回：受講ガイダンス 第2回：感性研究における主客の関係 第3回：パフォーマンスアートに関する感性研究（1） 第4回：パフォーマンスアートに関する感性研究（2） 第5回：文献講読/研究発表（1） 第6回：文献講読/研究発表（2） 第7回：文献講読/研究発表（3） 第8回：まとめと講評	
教科書 指定なし	
参考文献 三浦佳世（編）「知覚と感性（現代の認知心理学1）」，北大路書房（2010） 行場次朗（編），箱田裕司（編）「新・知性と感性の心理—認知心理学最前線」，福村出版（2014）	
成績評価方法 試 験 % レポート % 平常点評価 100% 受講態度および授業後半の研究発表などを総合的に評価します。 そ の 他 %	
備考・関連 URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">生態心理学特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">三嶋 博之</p>
授業の概要 生態心理学は、1)知覚者の動きによって生じる周囲の変化の中で持続するもの——すなわち不変項——を情報として利用することで環境の知覚が達成されること、および、2)その情報が、環境内におけるアフォーダンスを特定すること、を主張している。この授業では、Gibson, J. J. による『生態学的知覚システム—感性をとらえなおす』を講読し、ディスカッションすることを通じて、生態心理学のアイディアの基礎とその展開可能性について検討する。	
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・「不変項」、「アフォーダンス」、「知覚システム」などの生態心理学の鍵概念について深く理解する (B56-3)。 ・生態心理学が、人間科学においてどのような意義を持ちうるのかについて議論できるようになる (C5-1, C6-1, C6-2)。 	
授業計画 第1回：【オリエンテーション】 授業の趣旨の説明、ならびに輪講担当章の決定。 第2回：【講義】 ギブソンの知覚理論の基礎 第3回：【文献講読:1】 第1章 刺激作用の源としての環境 第2章 刺激作用の獲得 第3章 知覚システム 第4回：【文献講読:2】 第4章 基礎定位システム 第5章 聴覚システム 第5回：【文献講読:3】 第6章 触覚システムとその構成要素 第7章 触覚—身体覚システムの能力 第8章 知覚システムとしての味わうことと嗅ぐこと 第6回：【文献講読:4】 第10章 視覚システム——環境の情報 第9章 視覚システムの進化 第7回：【文献講読:5】 第11章 技術による光の構造化 第12章 包囲情報のピックアップ——走査 第8回：【文献講読:6】 第13章 情報ピックアップ理論 第14章 不完全な知覚の諸原因	
教科書 ジェームズ・J. ギブソン 『生態学的知覚システム—感性をとらえなおす』 佐々木正人・古山宣洋・三嶋博之 (訳)、東京大学出版会.	
参考文献 「アフォーダンスの構想—知覚研究の生態心理学的デザイン」 佐々木正人・三嶋博之 (訳)、東京大学出版会 「デクステリティ 巧みさとその発達」 N. A. ベルンシュタイン (著)、工藤和俊 (訳)、金子書房	
成績評価方法 試 験 % レポート % 平常点評価 100% 発表とレジュメの完成度、ならびにディスカッションへの貢献度によって行う そ の 他 %	
備考・関連 URL <ul style="list-style-type: none"> ・初回の授業は、輪講の担当章を決めるので、単位を必要とする者は必ず出席すること。 ・ディスカッション形式の授業なので、フィードバックは授業中に行う。 	

授業科目名： マルチモーダルコミュニケーション特論	担当教員名： 関根 和生																												
授業の概要 私たちは、他者とコミュニケーションする際、発話とともに手や腕を動かして情報を伝達している。本特論では、こうした発話に伴う身振りに焦点を当て、その機能や産出・理解のメカニズム、発達過程について、文献購読を通じて学習する。毎回、予め決められたトピックに関する論文を発表・討論し、身振りと言話に関する理解を深めていく。																													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションにおける身振りの役割や機能を理解する。(C5-1, C6-2) ・身振りや発話に関する実験や調査方法を理解し、それらを批判的に検討することができる。(B56-3) 																													
授業計画 第1回：授業の概要と発表分担：身振り研究の歴史と身振りの種類 第2回：文献購読(1)：身振りと思考との関係 第3回：文献購読(2)：身振りと言話伝達との関係 第4回：文献購読(3)：会話における身振りの役割 第5回：文献購読(4)：身振りの発達1 第6回：文献購読(5)：身振りの発達2 第7回：文献購読(6)：身振りの理解 第8回：文献購読(6)：身振りの文化差																													
教科書 なし																													
参考文献 David McNeill. “Hand and Mind” (1992), University of Chicago Press. Gale Stam & Mika Ishino (Eds.) “Integrating Gestures” (2011), John Benjamins Publishing Company.																													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試</td> <td style="width: 10%;">験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td style="width: 70%;"></td> </tr> <tr> <td>レ</td> <td>ポ</td> <td>レ</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ポ</td> <td>ー</td> <td>ポ</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ー</td> <td>ト</td> <td>ー</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ト</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>平</td> <td>常</td> <td>点</td> <td>70% 発表要旨, 発表内容, 受講姿勢</td> </tr> <tr> <td>そ</td> <td>の</td> <td>他</td> <td>30% 出席状況</td> </tr> </table>		試	験	%		レ	ポ	レ		ポ	ー	ポ		ー	ト	ー		ト				平	常	点	70% 発表要旨, 発表内容, 受講姿勢	そ	の	他	30% 出席状況
試	験	%																											
レ	ポ	レ																											
ポ	ー	ポ																											
ー	ト	ー																											
ト																													
平	常	点	70% 発表要旨, 発表内容, 受講姿勢																										
そ	の	他	30% 出席状況																										
備考・関連URL																													

授業科目名： 劇場認知科学特論	担当教員名： 野村 亮太												
授業の概要 認知科学では、個人を対象とした実証研究を通して人間の知性や感性について明らかにしてきた。しかし、劇場では複数の観客が同時に鑑賞することがほとんどである。これを踏まえて近年では、劇場で生じる同期現象や集合的感情について研究が進められてきている。本科目では、劇場での表現と鑑賞に関する研究動向とそこから得られた知見について講義し、学問的な意義や手法の妥当性等についてディスカッションする。受講者には、知識を得ることとどまらず、指定された原著論文（英文）を読み、議論に主体的に参加することを期待する。													
授業の到達目標 1) 認知科学分野における既存の知識を知り、自分自身の研究課題と対比や方法論の検討をすることを通して、研究テーマについて吟味・探究することができる（B56-3, C6-1） 2) 認知科学分野における論文の図表を読み、本文の内容との対応関係から分析結果を正確に読み取り、そのうえで批判的に検討することができる（Ad56-3） 3) 学術論文（英文）を読んで自分の意見を構築し、他者へ向けて説明できる（Aa5-1）													
授業計画 第1回：オリエンテーション 本科目の位置づけを示し、授業の概要や到達目標、レスポンス・シートの活用方法について説明する。また、劇場とは何か、認知科学とは何かについて論じる。 第2回：情報処理理論と感情理論 劇場認知科学の基礎知識として、人間の情報処理および感情理論について概観する。また、事前課題として、論文の指定範囲を読むことを求める。 第3回：個人の劇場体験 観客個人の体験する笑い、感動、鳥肌、没頭体験等について、研究知見を説明する。また、事前課題として、論文の指定範囲を読む。 第4回：集合的感情の条件 観客群が時空間を共有して生じる集合的感情の条件である近接性について論じる。また、事前課題として、論文の指定範囲を読む。 第5回：集合的感情の生起メカニズム 集合的感情の生起メカニズムとして、共通入力同期および相互作用同期について説明する。 第6回：表現者の身体知 表現者の身体知について、“意味敏感性”（参考文献①）の観点から説明する。また、事前課題として、論文の指定範囲を読む。 第7回：即興 制約のある即興や型に生じるの即興について説明する。また、事前課題として、論文の指定範囲を読む。 第8回：劇場認知科学について知見の整理を行う。また、レポートの講評を行う。													
教科書 なし													
参考文献 ①安西祐一郎（2003）問題解決の心理学 人間の時代への発想（中公新書）													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>60%</td> <td>授業期間の終盤に内容理解を評価するレポートを課します。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>40%</td> <td>授業毎に行うレスポンス・シートへの記述および受講態度を総合的に評価します。</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	60%	授業期間の終盤に内容理解を評価するレポートを課します。	平常点評価	40%	授業毎に行うレスポンス・シートへの記述および受講態度を総合的に評価します。	その他	%	
試験	%												
レポート	60%	授業期間の終盤に内容理解を評価するレポートを課します。											
平常点評価	40%	授業毎に行うレスポンス・シートへの記述および受講態度を総合的に評価します。											
その他	%												
備考・関連 URL Course n@vi お知らせ機能を利用して、提出課題、試験答案等についての講評をする。また、提出課題については授業内で、その都度、フィードバックする場合もある。なお、本授業の一部は対話型で進める。議論は、8回のうち6回程度を見込んでいる。													

授業科目名： 人間生体機能動態学特論	担当教員名： 宮崎 正己
授業の概要 人間の基本的な事柄について言及をしていく。特に、人の健康に関する問題の認識把握をおこなう。	
授業の到達目標 ・本授業を通して、人間の生体の深淵なる側面を理解してもらうことが、到達目標である。	
授業計画 第1回：オリエンテーション。人間生体機能動態学とは。 第2回：人間は、未知なるものに関する論文検索 第3回：人間の生理学的特性に関する論文輪読 第4回：人間の快適性とに関する論文輪読 第5回：人間と周りを支える環境に関する論文輪読 第6回：人間と労働に関する論文輪読 第7回：人間の疲労に関する論文輪読 第8回：人の快適性に関わる諸問題について、論議する。	
教科書	
参考文献	
成績評価方法 試験 % 到達度の確認は、実施しない。 レポート 20% 数回、提出する。 平常点評価 80% 出席による。 その他 % その他	
備考・関連URL	

授業科目名： <p style="text-align: center;">学習環境デザイン特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">尾澤 重知</p>
授業の概要 学校、企業、地域など、さまざまな場面で人々の主体的かつ創造的な学習を支援することが求められています。本授業では、人の学びを支える環境（空間・活動・共同体・人工物）を構成し、評価する方法である「学習環境デザイン」の考え方について学びます。前半では、関連する理論群に加えて、ワークショップ・建築と家具・コミュニティ・デジタル教材などの実践と研究の事例についても概観し、理解を深めます。後半では、具体的な学習環境を構想するグループ演習を通して、課題解決に学習環境デザインを応用する力を習得します。	
授業の到達目標 (1) 学習環境デザインの関連理論について理解し、具体例を交えて説明できる (D56-2) (2) 学習環境デザインの実践事例の特徴と、現場の課題について理解することができる (B56-2) (3) 学習環境デザインの開発・実践・評価研究の方法論について理解することができる (B56-3) (4) 実社会の課題を学習環境デザインのアプローチで解決することができる (E56-2)	
授業計画 第1回：学習環境デザインとは何か Learning by Design: Iterations of design challenges for better learning of science skills (Kolodner 2002) などについて検討します。 第2回：活動のデザイン（1）関連理論 Inventing to Prepare for Future Learning (Schwartz& Martin 2004) などについて検討します。 第3回：活動のデザイン（2）実践と研究の事例 個人もしくはグループで関連研究や実践を発表します。 第4回：空間のデザイン（1）関連理論 Community knowledge assessment in a knowledge building environment (Hong & Scardamalia 2014) などについて検討します。 第5回：空間のデザイン（2）実践と研究の事例 個人もしくはグループで関連研究や実践を発表します。 第6回：共同体のデザイン（1）関連理論 Models of Innovative Knowledge Communities (Paavola et al. 2004) などについて検討します。 第7回：共同体のデザイン（2）実践と研究の事例 個人もしくはグループで関連研究や実践を発表します。 第8回：人工物のデザイン（1）関連理論 To Ask a Question, One Must Know Enough to Know What Is Not Known (Miyake & Norman 1979) などについて検討します。 第9回：人工物のデザイン（2）実践と研究の事例 個人もしくはグループで関連研究や実践を発表します。 第10回：学習環境の評価方法 個人もしくはグループで関連研究や実践を発表します。 第11回：実践活動のデザインと評価（4）学生による構想発表 個人もしくはグループで発表を行います。 第12回：学習環境デザインの演習（1） 解決すべき問題を検討し、洗練します。 第13回：学習環境デザインの演習（2） 解決案を複数検討した上で、解決のための試作品（プロトタイプ）を作成します。 第14回：学習環境デザインの演習（3） プロトタイプの評価を行います。 第15回：まとめ・総括 授業内で成果を発表し、相互評価やレビューを行います。	
教科書 授業内で紹介します。	
参考文献 山内祐平, 森玲奈, 安齋勇樹(2013) ワークショップデザイン論—創ることで学ぶ。東京大学出版会, 東京	

安齋勇樹(2014) 協創の場のデザイナーワークショップで企業と地域が変わる. 幻冬舎, 東京
その他は授業内で紹介します。

成績評価方法

試験	%
レポート	30% 授業内に取り組む課題として出題します
平常点評価	70% 毎回のミニレポート、プロジェクトの進捗報告
その他	%

備考・関連 URL

- ・学習科学分野の基本的な文献を扱いますが、日本語の文献は原則として用いません。授業でも日本語訳等は提供しません。・一部授業回は、対面ではなく、オンラインで実施をします。チームコミュニケーションツールの Slack や Wiki (MediaWiki) などを利用します。また、Skype などのオンライン会議ツールを利用する場合があります。ツールの利用については最低限のサポートをしますが、自身で慣れていただく必要があります。
- ・授業の連絡事項は、Course N@vi で掲載すると同時に、メールでも行います。
- ・内容によっては、授業時間外でも、グループで活動をする時間を確保する必要があります。
- ・グループワークの成果に対するフィードバックは授業内で行います。
- ・最終発表は、履修者の合意が得られた場合は、土曜日に実施する予定です。

授業科目名： 教育システム開発特論	担当教員名： 井上 典之
授業の概要 行動主義から構成主義、認知科学や人間性心理学に基づき学習観は変遷してきているが、本講義ではそれぞれの学習観に基づいていかに学習の質を高め、学習者の人間成長を促進するための教育システムを構築することができるかについて論究する。教育システムとは物理的環境だけでなく、教師が成長・発達するプログラムなどを含めた人的・文化的環境をも意味する。さらに家庭、地域、社会との関係まで視野を広げ、現代における教育システムのあり方について論究する。	
授業の到達目標 (1) 教育システムを開発するために必要とされる学習、学習環境、教授、教師の専門技能発達に関する理論と研究を理解することができる (C5-1) (2) 現代社会における教育の課題を様々な観点から検討し、解決の方向性を明らかにすることができる (C6-1) (3) 様々な研究手法やアプローチを使って教育における課題を解決するための教育システムを研究するプロセスを理解することができる (D56-2)	
授業計画 第1回：イントロダクション： コースの概要、アサインメント、授業の進め方や教育システム開発を研究することの意義や面白味について論じます。 第2回：教育システムとは？： 教育をシステムとして捉える必要とそのポテンシャルについて論じ、様々な教育システムの成り立ちや機能について考えます。 第3回：教育システム開発のプロセスと課題： 教育システムを開発するためのプロセスと、教育システム開発における理論と実践のギャップ、文化的基盤、研究手法などについて論じます。 第4回：教育イノベーションについて： ICTなどを使った教育イノベーションの例を教育システム開発の見地から分析し、教育イノベーションを成功させるために必要と考えられる知見について考えます。 第5回：教育システム開発の理論的フレームワーク(行動主義)： 教育システム開発における行動主義(Behaviorism)の役割とその課題について、いくつかのケーススタディーをもとにして論じます。 第6回：教育システム開発の理論的フレームワーク(情報処理アプローチ)： 教育システム開発における情報処理アプローチ(Information Processing Approach)の役割とその課題について、いくつかのケーススタディーをもとにして論じます。 第7回：教育システム開発の理論的フレームワーク(構成主義)： 教育システム開発における構成主義(Constructivism)の役割とその課題について、いくつかのケーススタディーをもとにして論じます。 第8回：教育システム開発のフレームワーク(人間性心理学)： 教育システム開発における人間性心理学(Humanistic Psychology)の役割とその課題について、いくつかのケーススタディーをもとにして論じます。 第9回：教育システム開発のフレームワーク(社会文化主義)： 教育システム開発における社会文化主義(Socio-culturalism)の役割とその課題について、いくつかのケーススタディーをもとにして論じます。 第10回：教育システム開発のフレームワーク(批判的教育学)： 教育システム開発における批判的教育学(Critical Pedagogy)の役割とその課題について、いくつかのケーススタディーをもとにして論じます。 第11回：教育システム開発の実践分析 I(学校教育の実践)： 現代社会の様々な課題を解決するための教育システム開発について、学校教育における実践の例について多様な理論的・手法的観点から分析・議論します。 第12回：教育システム開発の実践分析 II(社会人教育の実践)： 現代社会の様々な課題を解決するための教育システム開発について、社会人教育における実践の例について多様な理論的・手法的観点から分析・議論します。	

第13回：総論 & リフレクション：

前回までの議論についての総論とリフレクションを行い、それぞれの今後にとっての「教育システム開発」との関わりについて考えます。

第14回：ファイナル・プロジェクト発表会 & フィードバック I (明快性/論理性)：

ファイナル・プロジェクトについてのプレゼンテーションを行い、それぞれのプロジェクトについてのディスカッションとフィードバックを行います。

第15回：ファイナル・プロジェクト発表会 & フィードバック II (創造性/有用性)：

前回に引き続きファイナル・プロジェクトについてのプレゼンテーションを行い、それぞれのプロジェクトについてのディスカッションとフィードバックを行います。

教科書

Inoue, N. (2012). Mirrors of the mind: An introduction of mindful ways of thinking education. New York: Peter Lang Publishing.

参考文献

事前にオンラインで文献が与えられます。

成績評価方法

試験 %

レポート 50% 学習内容の理解の深さを評価します。授業の中で詳しいガイドラインが与えられます。

平常点評価 50% いくつかの小課題、授業への貢献度と出席により評価します。

その他 %

備考・関連URL

最終授業で全体に対してレポートについてのフィードバックを行います。

授業科目名： <p style="text-align: center;">教育データサイエンス特論</p>	担当教員名： <p style="text-align: right;">杉澤 武俊</p>
授業の概要 教育研究において、実際の研究論文等でも見られる、通常行われる定型的な（ルーチン化された）統計的データ解析手法によって生じる問題点について論じます。具体的なトピックとして、欠測値処理の方法、量的変数のカテゴリ化、前提条件確認のための予備的検定、事後検定の選択、階層構造をもつデータの取り扱いなどを取り上げます。より妥当なデータ解析を行うための代替法について考えるとともに、自らの実践についても振り返る機会とします。	
授業の到達目標 (1) データ解析法が妥当であるか否かを判断するための観点を理解する。(F56-2) (2) 既存のデータ解析法によって生じる問題とその解決法について説明できる。(B56-4) (3) 自身の研究におけるデータ解析の実践について振り返り、具体的な改善案について提案できる。(Ad56-2/C6-2)	
授業計画 第1回：イントロダクション 授業概要や到達目標、進め方、本科目の位置づけなどを紹介します。また、受講者の既習知識の確認を行います。 第2回：欠測値発生メカニズム データにおける欠測値発生メカニズムについて解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第3回：最尤推定法による欠測値処理 最尤推定法による欠測値処理について解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第4回：単一代入法による欠測値処理 単一代入法による欠測値の処理について解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第5回：多重代入法による欠測値処理 多重代入法による欠測値処理について解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第6回：量的変数のカテゴリ化 量的変数データをカテゴリ化することの影響について解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第7回：正規性の事前検定 分布の正規性を確認する事前検定の得失について論じます。資料の事前読了による予習を求めます。 第8回：等分散の事前検定 分布の等分散性を確認する事前検定の得失について論じます。資料の事前読了による予習を求めます。 第9回：多重比較法 分散分析における多重比較法の性質について解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第10回：交互作用の事後検定 分散分析における交互作用の事後検定の方法について論じます。資料の事前読了による予習を求めます。 第11回：独立性検定の事後検定 クロス集計表における独立検定の事後検定の方法について論じます。資料の事前読了による予習を求めます。 第12回：階層構造無視の問題 データの階層構造を無視した統計的分析の問題について論じます。資料の事前読了による予習を求めます。 第13回：階層構造を考慮した分析 データの階層構造を適切に考慮した統計的分析について解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第14回：不完全な階層構造のモデル 不完全な階層構造を持つデータを分析する統計モデルについて解説します。資料の事前読了による予習を求めます。 第15回：まとめと補足 全体のまとめと補足事項の解説を行います。事前学習として、これまでの沿う復習を求めます。	

教科書

なし。

参考文献

授業内で折に触れて紹介します。

成績評価方法

試験 %

レポート 100% 学期末に1回、本科目で学習した事項を踏まえて、自身もしくは先行研究等のデータ分析の実践を批判的に見直すことができているかを評価します。

平常点評価 %

その他 %

備考・関連URL

受講者の関心領域や学修状況に応じて扱う順番や割合を変更するなど、各回で扱う内容について調整をする場合があります。

受講者数や受講者の要望等に応じてコンピュータを使用した演習を含める場合があります。

レポートについては Course N@vi のお知らせ機能などを通じてフィードバックを行います。

授業科目名： 学校学習システム特論	担当教員名： 浅田 匡
授業の概要 学校における学習のあり方を、システムという観点から考究する。Teaching Model は、インストラクショナル・デザインとして様々な学習理論に基づき開発されてきた。本講義では、授業の実践性という観点から、学校学習に関するモデルを取り上げ、概説する。取り上げるモデルとしては、J. B. キャロルの学校学習モデル、B. S. ブルームの学校学習モデル等である。これらはいずれも学力向上との関係から考えられてきたモデルである。さらに、わが国において実践されてきた様々な理論に基づくモデルとその具体的な取り組みを取り上げ、これからの学校学習システムを考える。その際、教師自身の成長（職能はったうを含む）、子どもの学習の改善、学校文化、専門性の学習共同体といった観点から論考する。	
授業の到達目標 (1) 学校学習モデルを理解する。 (2) わが国で開発され数多く実践されてきた授業モデルの特徴と学校学習の何を克服しようとしてきたかを理解する。 (3) 社会の変化を考え、これからの学校学習についてシステム論の観点から考えることができる。 (B56-2、C6-1、C6-2、Ad56-3)	
授業計画 第1回：学校学習システム システムとしての学校学習とは何かということについて論考する/school learning model というところを考える 第2回：学校学習モデル（1） キャロルの学校学習モデルについて論考する 第3回：学校学習モデル（2） ブルームの学校学習モデルとマスタリーラーニングについて論考する 第4回：学校学習モデル（3） QAIT モデルについて論考する 第5回：わが国における授業モデル（1）学び方学習 学び方学習研究会の基本的な考え方と実践について論考する 第6回：わが国における授業モデル（2）仮説実験授業 仮説実験授業の基本的な考え方と実践について論考する 第7回：わが国における授業モデル（3）極地方式研究会 極地方式研究会の考え方と実践について論考する 第8回：わが国における授業モデル（4）範例方式 判例方式の考え方と実践について論考する 第9回：わが国における授業モデル（5）完全習得学習 完全習得学習の日本での実践について論考する 第10回：わが国における授業モデル（6）発見学習 発見学習についての考え方と実践について論考する 第11回：わが国における授業モデル（7）プログラム学習 プログラム学習についての考え方と実践について論考する 第12回：わが国における授業モデル（8）バズ学習 バズ学習の考え方と実践について論考する 第13回：わが国における授業モデル（8）システムズ・アプローチ システムズ・アプローチについての考え方と実践について論考する 第14回：カリキュラムと学校学習 カリキュラムの構造と編成を踏まえ、学校学習とカリキュラムの関係について論考する 第15回：学校学習と授業モデル 多様な心理学理論等に基づく授業モデルと学校学習との関係について検討し、学校学習システムにおける授業モデルの役割を論考する	
教科書 随時資料（研究論文を含む）を配布する	

参考文献

成績評価方法

試験	%	
レポート	60%	論理性と理解度
平常点評価	40%	出席と発表
その他	%	

備考・関連URL

課題へのフィードバック：講義内でそれぞれに評価フィードバックを行う。レポートについては、コースナビにて講評を行う。

授業科目名： ヒューマンコンピュータインタラクション特論	担当教員名： 金 群												
授業の概要 ヒューマンコンピュータインタラクション (HCI) とは、従来のソフトウェア工学的アプローチに加え、システム利用者である人間のふるまいを考慮した学際的な視野に立って、人間とコンピュータとの相互作用について研究する学問である。授業では、人間中心という基本理念をもとに、HCI に関する理論と実践について学び、ユーザインタフェースを含む情報システムのデザインと開発・評価手法を習得する。さらに、HCI に関する展望と最新発展動向を紹介し、今後の学習の指針を与える。													
授業の到達目標 ・ヒューマンコンピュータインタラクションに関する最新知識および情報システム学やソフトウェア工学の人間的、社会的な側面を正しく理解することができる。 ・学際的な視点からユーザインタフェースを含む情報システムの設計・開発・応用・評価を行うことができる。 【中目標 No.】 B56-3, B56-4, C5-1, D56-2, E56-2, E56-1													
授業計画 第1回：イントロダクション（授業の概要と進め方）・HCI の基本的コンセプト 第2回：Human-Centric Computing の理念 第3回：インタラクションデザイン 第4回：HCI のためのタスク分析 第5回：事例分析1（Life Log：人間的・社会的側面） 第6回：社会ネットワーク分析 第7回：データマイニングとパターン抽出 第8回：人間情報行動分析 第9回：さりげない情報行動と Eye-Tracking 第10回：事例分析2（Life Log：技術的側面） 第11回：HCI の視点から考えるパーソナルデータの利活用技術 第12回：パーソナルアナリティクスと個人モデル構築 第13回：未来 Smart Life：コンセプト、デザイン、HCI とシナリオ 第14回：HCI の最新発展動向と今後の展望：ユビキタスユーザモデリングとパーベイシブ HCI 第15回：応用シナリオ（Life Log：ユビキタスヘルスサービスの実現に向けて）													
教科書 とくに指定しない													
参考文献 授業中に紹介する													
成績評価方法 <table border="0"> <tr> <td>試験</td> <td>%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポート</td> <td>70%</td> <td>中間レポート（2回、20%×2）：授業内容に対する理解度、分析と考察内容 期末レポート（30%）：授業内容に対する理解度、応用の適切さと考察内容</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>30%</td> <td>主体的（積極的）な授業参加度、授業中での発言、授業中の小レポートなどを総合して評価する</td> </tr> <tr> <td>その他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試験	%		レポート	70%	中間レポート（2回、20%×2）：授業内容に対する理解度、分析と考察内容 期末レポート（30%）：授業内容に対する理解度、応用の適切さと考察内容	平常点評価	30%	主体的（積極的）な授業参加度、授業中での発言、授業中の小レポートなどを総合して評価する	その他	%	
試験	%												
レポート	70%	中間レポート（2回、20%×2）：授業内容に対する理解度、分析と考察内容 期末レポート（30%）：授業内容に対する理解度、応用の適切さと考察内容											
平常点評価	30%	主体的（積極的）な授業参加度、授業中での発言、授業中の小レポートなどを総合して評価する											
その他	%												
備考・関連 URL 第5、10と15回目の授業でこれまでの授業内容に関しての質問や課題などに対するフィードバックを行う。													

授業科目名：発達動機づけ論ゼミ（1） A	担当教員名：外山 紀子												
授業の概要 発達および動機づけについて、基本的な文献を購読し、人間の発達および学びの過程に関する理解を深める。													
授業の到達目標 <ul style="list-style-type: none"> ・発達および動機づけに関する基本的な知識を身につける ・国内外の基本的な文献を批判的に読み解く力を身につける 													
授業計画 第1回：受講ガイダンス 第2回：文献購読と討論（1） 第3回：文献購読と討論（2） 第4回：文献購読と討論（3） 第5回：文献購読と討論（4） 第6回：文献購読と討論（5） 第7回：文献購読と討論（6） 第8回：文献購読と討論（7） 第9回：文献購読と討論（8） 第10回：文献購読と討論（9） 第11回：文献購読と討論（10） 第12回：文献購読と討論（11） 第13回：文献購読と討論（12） 第14回：文献購読と討論（13） 第15回：レポート課題と解説													
教科書 とくに指定しない													
参考文献 随時紹介する													
成績評価方法 <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 10%;">試 験</td> <td style="width: 10%;">%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>レポ ー ト</td> <td>50%</td> <td>報告レポートと最終レポートを評価する。</td> </tr> <tr> <td>平常点評価</td> <td>50%</td> <td>参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。</td> </tr> <tr> <td>そ の 他</td> <td>%</td> <td></td> </tr> </table>		試 験	%		レポ ー ト	50%	報告レポートと最終レポートを評価する。	平常点評価	50%	参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。	そ の 他	%	
試 験	%												
レポ ー ト	50%	報告レポートと最終レポートを評価する。											
平常点評価	50%	参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。											
そ の 他	%												
備考・関連 URL 合宿を実施予定													

授業科目名：発達動機づけ論ゼミ（1） B	担当教員名：外山 紀子
授業の概要 発達および動機づけについて、各自が関心のあるテーマを絞り、それを深めていく。各自の発表が主となるが、参加者全員で議論していく。	
授業の到達目標 ・発達・動機づけに関する先行研究を踏まえ、適切な研究テーマを設定する ・テーマに沿った研究計画を立てる	
授業計画 第1回：受講ガイダンス 第2回：各自の研究発表（1） 第3回：各自の研究発表（2） 第4回：各自の研究発表（3） 第5回：各自の研究発表（4） 第6回：各自の研究発表（5） 第7回：各自の研究発表（6） 第8回：各自の研究発表（7） 第9回：各自の研究発表（8） 第10回：各自の研究発表（9） 第11回：各自の研究発表（10） 第12回：各自の研究発表（11） 第13回：各自の研究発表（12） 第14回：各自の研究発表（13） 第15回：レポート課題と解説，全体に対するフィードバック	
教科書 とくに指定しない	
参考文献 随時紹介する	
成績評価方法 試 験 % レポート 50% 報告レポートと最終レポートを評価する。 平常点評価 50% 参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。 そ の 他 %	
備考・関連URL 合宿を実施予定	

授業科目名：発達動機づけ論ゼミ（2） A	担当教員名：外山 紀子
授業の概要 各自の研究テーマに沿って、国内外の学術論文の講読と討論を行う。	
授業の到達目標 ・自分の研究テーマに関連のある学術論文を批判的に読み解く力を身につける。 ・自分の研究テーマに即した研究計画をたて、それを実施する力を身につける。	
授業計画 第1回：受講ガイダンス 第2回：文献購読と討論（1） 第3回：文献購読と討論（2） 第4回：文献購読と討論（3） 第5回：文献購読と討論（4） 第6回：文献購読と討論（5） 第7回：文献購読と討論（6） 第8回：文献購読と討論（7） 第9回：文献購読と討論（8） 第10回：文献購読と討論（9） 第11回：文献購読と討論（10） 第12回：文献購読と討論（11） 第13回：文献購読と討論（12） 第14回：文献購読と討論（13） 第15回：レポート課題と解説	
教科書 とくに指定しない	
参考文献 随時紹介する	
成績評価方法 試験 % レポート 50% 報告レポートと最終レポートを評価する。 平常点評価 50% 参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。 その他 %	
備考・関連 URL 合宿を実施予定	

授業科目名：発達動機づけ論ゼミ（2） B	担当教員名：外山 紀子
授業の概要 各自の研究テーマに沿って得られたデータの検討および討論を行う。	
授業の到達目標 ・自分の研究テーマに即して、研究計画をたて、それを実施する力を身につける。 ・論文を作成する力を身につける。	
授業計画 第1回：受講ガイダンス 第2回：各自の研究発表（1） 第3回：各自の研究発表（2） 第4回：各自の研究発表（3） 第5回：各自の研究発表（4） 第6回：各自の研究発表（5） 第7回：各自の研究発表（6） 第8回：各自の研究発表（7） 第9回：各自の研究発表（8） 第10回：各自の研究発表（9） 第11回：各自の研究発表（10） 第12回：各自の研究発表（11） 第13回：各自の研究発表（12） 第14回：各自の研究発表（13） 第15回：レポート課題と解説	
教科書 とくに指定しない	
参考文献 随時紹介する	
成績評価方法 試験 % レポート 50% 報告レポートと最終レポートを評価する。 平常点評価 50% 参加度、意欲、発表の準備状況と内容を評価する。 その他 %	
備考・関連 URL 合宿を実施予定	